

不動木遺跡 発掘調査報告書

1986

山 形 県
山形県教育委員会

ゆ す る ぎ
不動木遺跡
発掘調査報告書

昭和61年3月

山 形 県
山形県教育委員会

序

本報告書は、山形県教育委員会が、山形県農林水産部の委託を受けて昭和60年度に実施した、県営ほ場整備事業大堰第2地区にかかる「不動木遺跡」の緊急発掘調査の結果をまとめたものであります。

不動木遺跡は、山形県の母なる川最上川と、朝日山系に源を発する清流寒河江川の合流点に近い、肥沃の地に営まれた古代の集落です。本遺跡の周辺にはこの肥沃の土地を利用したと考えられる多くの遺跡や律令体制下で営まれた条里遺構の存在なども推測されており、古代出羽国最上郡を考える上で貴重な地域となっております。

今回の調査におきましては、良好な遺存状況を示す竪穴住居や掘立柱建物跡、大量の一括土器が出土した溝跡の他、古代人が使用した円形竈など、往時を知る上で貴重な資料が得られました。

これらの文化遺産は、私どもの祖先の歴史を語る資料としてかけがえのない財産であります。千数百年もの長い間に亘って土に埋もれてきたこのような遺産を保護し、未来に継承してゆくことは、現代に生きる私どもの重要な責務であると考えます。

近年、県民福祉の向上や地域環境の整備を目的とした諸開発事業と埋蔵文化財とのかかわりは増加の傾向にあります。山形県教育委員会におきましては「心広くたくましい県民の育成」という立場から、これらの間の調整をはかり、今後とも埋蔵文化財の保護と活用のため努力を続けてまいる所存であります。

最後であります。本調査に御協力いただいた山形県農林水産部・同村山西部土地改良事務所・大堰土地改良区・河北町教育委員会・地元の方々並びに関係各位に感謝申し上げますとともに、本書が埋蔵文化財に対する理解を深め、その保護・普及の一助となれば幸いと存じます。

昭和61年3月

山形県教育委員会
教育長 高橋 和雄

例 言

- 1 本書は、山形県農林水産部の委託を受け、山形県教育委員会が昭和60年度に実施した県営ほ場整備事業大堰第2地区にかかる「不動木遺跡」の緊急発掘調査の報告書である。発掘調査は昭和60年7月1日から同10月18日まで、延69日間実施した。
- 2 調査体制は下記のとおりである。

調査主体 山形県教育委員会
調査担当 山形県埋蔵文化財緊急調査団
調査担当者 主任調査員 佐々木洋治〔山形県教育庁文化課埋蔵文化財主査〕
佐藤 庄一〔山形県教育庁文化課埋蔵文化財係長〕
現場主任 長橋 至〔山形県教育庁文化課技師〕
調査員 太田 優〔山形県教育庁文化課嘱託〕
事務局 事務局長 小関 陽三〔山形県教育庁文化課長〕
事務局長補佐 加藤 友信〔山形県教育庁文化課長補佐〕
事務局員 斉藤世都子〔山形県教育庁文化課主事〕
中嶋 寛〔山形県教育庁文化課主事〕
氏家 修一〔山形県教育庁文化課主事〕
- 3 挿図縮尺は遺構で1/40・1/60、遺物で1/2・1/3・1/4がある。各図にスケールを示した。図版の遺物は、1/1・1/3を基本としている。土器実測図は断面白ヌキ；土師器 点描：あかやき土器 黒：須恵器を示す。色調は「新版標準土色帖」に拠った。
- 4 本文中の記号は以下のとおりである。ST：竪穴住居跡 SB：掘立柱建物跡 SD：溝跡 SK：土塊 EP：柱穴を示す。方位は磁北としている。
- 5 本報告書は長橋至が担当・執筆した。挿図・図版作成にあたっては、荘司宏子・辻 広美・徳永裕子・佐藤めぐみ・富田和子・漆山順子・荒井久美子・原田ひろみの補助を得た。
- 6 本書の編集は長橋が担当し、全体については佐々木洋治が総括した。

目 次

I 調査の経緯	
1 調査に至る経過	1
2 調査の方法と経過	1
II 遺跡の立地と環境	
1 地理的環境	2
2 歴史的環境	2
III 遺跡の概観	
1 遺跡の層序	4
2 遺構と遺物の分布	4
IV 遺 構	
1 掘立柱建物跡	7
2 竪穴住居跡	10
V 遺 物	25
VI まとめ	60

挿 図 目 次

第1図 不動木遺跡・周辺の遺跡位置図	3
第2図 土層柱状図	4
第3図 遺跡全体図	5
第4図 遺構配置図	6
第5図 9号掘立柱建物跡実測図	8
第6図 10号掘立柱建物跡実測図	9
第7図 2号竪穴住居跡実測図	13
第8図 3号竪穴住居跡実測図	14
第9図 4号竪穴住居跡実測図	15
第10図 5号竪穴住居跡実測図	16

第11図	6号竪穴住居跡実測図	17
第12図	8号竪穴住居跡実測図	18
第13図	30号竪穴住居跡実測図	19
第14図	土 墳 (1)	21
第15図	土 墳 (2)	22
第16図	1号溝跡実測図 (1)	24
第17図	1号溝跡土器出土状況	25
第18図	出土土器実測図・拓影図 (1) SB9・ST2・ST3	29
第19図	出土土器実測図 (2) ST3	30
第20図	出土土器実測図 (3) ST3	31
第21図	出土土器実測図・拓影図 (4) ST4	32
第22図	出土土器実測図 (5) ST5	33
第23図	出土土器実測図 (6) ST5・ST30	34
第24図	出土土器実測図 (7) ST30・SK48	35
第25図	出土土器実測図 (8) SD1出土 (1)	36
第26図	出土土器実測図 (9) SD1出土 (2)	37
第27図	出土土器実測図 (10) SD1出土 (3)	38
第28図	出土土器実測図 (11) SD1出土 (4)	39
第29図	出土土器実測図 (12) SD1出土 (5)	40
第30図	出土土器実測図 (13) SD1出土 (6)	41
第31図	出土土器実測図 (14) SD1出土 (7)	42
第32図	出土土器実測図 (15) SD1出土 (8)	43
第33図	出土土器実測図 (16) SD1出土 (9)	44
第34図	出土土器実測図 (17) SD1出土 (10)	45
第35図	出土土器実測図・拓影図 (18) SD1出土 (11)	46
第36図	出土土器実測図・拓影図 (19) SD1出土 (12)	47
第37図	出土土器実測図・拓影図 (20) SD1出土 (13)・包含層出土	48
第38図	出土土製品・石製品実測図	49
第39図	土師器分類図	50
第40図	須惠器蓋・高台付坏分類図	51
第41図	須惠器坏分類図	52
第42図	須惠器壺・甕・横瓶分類図	53
第43図	あかやき土器分類図	54

図 版 目 次

図版 1	遺跡透景・試掘風景	図版17	土壌 (1)
図版 2	層序・調査風景	図版18	土壌 (2)
図版 3	S B 9・S B10	図版19	土壌 (3)
図版 4	S B 9 柱穴	図版20	S D 1 (1)
図版 5	S B10柱穴	図版21	S D 1 (2)
図版 6	S T 2 (1)	図版22	出土遺物 (1)
図版 7	S T 2 (2)	図版23	出土遺物 (2)
図版 8	S T 3 (1)	図版24	出土遺物 (3)
図版 9	S T 3 (2)	図版25	出土遺物 (4)
図版10	S T 4 (1)	図版26	出土遺物 (5)
図版11	S T 4 (2)	図版27	出土遺物 (6)
図版12	S T 5	図版28	山土遺物 (7)
図版13	S T 6 (1)	図版29	出土遺物 (8)
図版14	S T 6 (2)	図版30	出土遺物 (9)
図版15	S T 8	図版31	出土遺物 (10)
図版16	S T 30		

表 目 次

表一 1	須恵器坏 (ヘラ切り) 分類集成一覽	28
表一 2	遺物観察表(1)	55
表一 3	遺物観察表(2)	56
表一 4	遺物観察表(3)	57
表一 5	遺物観察表(4)	58
表一 6	遺物観察表(5)	59

I 調査の経緯

1 調査に至る経過

不動木遺跡は山形県遺跡地図（昭和53年3月）に、平安時代の集落跡として記載されている。この地に、昭和60年度事業として県営ほ場整備事業（大堰第2地区）が実施されることとなり、遺跡全域が事業区内に含まれることとなった。そのため、山形県教育委員会では、山形県農林水産部、同村山西部土地改良事務所、大堰土地改良区の関係機関と協議を重ね、昭和59年度に遺跡詳細分布調査を実施し、その内容・規模について概要を把握した（山形県埋蔵文化財調査報告書第94集 分布調査報告書（12））。その結果を踏まえ、前述の関係機関に当該する河北町教育委員会を交じえ、さらに協議を進め、昭和60年度に、緊急発掘調査を実施し、記録保存に資することとした。

調査は、山形県教育委員会が主体となり、昭和60年7月1日から10月8日までの期間でおこなった。

2 調査の方法と経過

調査は、3×3mのグリッド設定後（Y軸はN-16'-E）、6～15m毎に遺跡全体に坪掘区を設けた。前年度に実施した遺跡詳細の分布調査の結果をより確実にし、遺跡の中心部分を探るため、坪掘区は50箇所を数えた。以下、2～3週毎に経過を列記する。

7月1日～7月19日 1日に器材搬入。同日より坪掘りを開始する。15日までに坪掘りによる結果を踏まえ、70～89-30～46グリッドを中心に拡張し、精査区とした。

7月22日～8月2日 重機による表土の除去、その後の面整理をおこなう。拡張は2,790㎡となる。この段階で竪穴住居7棟、掘立柱建物跡2棟、溝跡5基、土壌・ピット多数が検出された。

8月5日～8月23日 遺構の精査に入る。SD1、ST2、ST4、ST8について調査を進める。（8月12日～16日は旧盆のため現場は休みとする。）

8月26日～9月6日 遺構の精査を継続する。ST3、ST5、ST6、ST7、SB9、SB10について調査をおこなう。

9月9日～9月27日 各ST・SBについては精査・記録をほぼ終了する。並行して、土壌、柱穴の精査に入る。雨天の日が多く、遺物の洗浄を大半終える。

9月30日～10月18日 各遺構の精査・記録を終了し、全体の記録をおこなう。10月15日に現地説明会を開催、河北町立溝延小学校児童、地元の人々など、約200名の参加を得る。

10月18日 器材を撤収し、現地での調査を終了する。

II 遺跡の立地と環境

1 地理的環境

山形県のほぼ中央に位置する山形盆地の北西部に葉山火山がある。標高1,462mの主峰葉山を中心として、その北～東側に古御葉山、鏡山、大高根山、黒森山などの峰々が周辺の山々から突出している。火山活動にともなう泥流状堆積物は葉山火山帯の北東部、南部に広く分布し、ところどころに台地状の地形を造り出している。

不動木遺跡の位置する一帯は、この葉山火山帯の東南、山形県の大動脈最上川と、朝日山系に源を発する寒河江川の合流地点にあたり、とくに、寒河江川により形成された扇状地の扇端部に立地している。同扇状地は勾配が緩く、保水力に富むため見事に開かれた水田地帯として今も稲作を主とする地域である。

遺跡は標高96mを測り、位置的には寒河江川左岸約300～500mに立地している。当然、寒河江川の氾濫原上となるが、遺跡南側（寒河江川寄り）が地表下約50cmで礫層となるのに対し、遺跡部分は自然堤防による微高地となっている。古代より洪水の記録が散見できる地域であるが、それだけに、古代の人々も集落の立地を考慮したことがうかがえる。

2 歴史的環境

寒河江川扇状地北半の標高90mライン添いには、古墳時代から奈良・平家時代に亘る遺跡が数多く分布する（第1図）。このうち、現在まで調査された遺跡についての概要は以下のとおりである。

^{しもやま}下横遺跡（昭和56年 県教委）は古墳時代中期（南小泉Ⅱ式）を主体とする遺存状態の良好な集落跡で9棟の竪穴住居と一括遺物が出土した。熊野台遺跡（昭和55年 県教委）は古墳時代初頭～平安時代後葉に亘る時期で特に9世紀初頭がその主体となる。熊野台遺跡に隣接する溝延馬場遺跡（昭和55年 河北町教委）もほぼ同じ内容をもつ。一の坪遺跡（昭和57年 河北町教委）では墨書土器中に「大山郷」の銘が見られ、古代羽田最上郡における大山郷の所在地について重大な資料を提供した。また、月山堂遺跡（昭和57年 河北町教委）では、奈良～平安時代の集落の様相が一部明らかにされた。その他、一の坪という地名及び字切図からこの一帯は条里遺構の存在が予測されている。

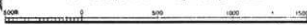
したがって、寒河江川と最上川の合流点の北面域は、古墳時代から平安時代にかけて、いわば継続的に集落の営まれた地域であり、とくに、不動木遺跡の主体となる奈良時代後半から平安時代にかけては、古代律令制との関わりの中で、大山郷の墨書土器の存在も含め、当該地域の古代史の解明に格好な資料を提供しつつあると言える。



周辺の遺跡一覧

No.	遺跡名	種別	時代	No.	遺跡名	種別	時代
1	不動木遺跡	築造跡	奈良・平安	6	畑中入道跡	築造跡	奈良・平安
2	更町遺跡	築造跡	奈良・平安	7	馬場遺跡	築造跡	奈良・平安
3	下藤遺跡	築造跡	古墳・奈良	8	熊野台遺跡	築造跡	奈良・平安
4	月山堂遺跡	築造跡	奈良・平安	9	溝原城	城跡	鎌倉・室町
5	畑中B遺跡	築造跡	奈良・平安	10	新田屋	城跡	鎌倉・室町

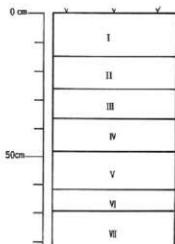
1:25,000 寒河江



III 遺跡の概観

1 遺跡の層序

本遺跡は寒河江川扇状地の扇端部に立地することは既述のとおりである。遺跡南側の寒河江川寄りには表土直下が砂礫層となり、全く遺跡の立地する地点とは異なる様相を呈する。遺跡部分の層序は右図に示したように、7層に分けられる。Ⅰ・Ⅱ層は耕作土、生活面はⅣ層と考えられるが、調査区内において旧地形が北面で低くなっているため、北面ではⅣ層で南東ではⅥ～Ⅶ層での遺構検出をおこなった。また、南東は遺構面が一部削平されたとも考えられ、検出した柱穴等は、その柱列構成が困難であった。また、遺物は包含層出土のものが極めて少ないため本報告では、主として遺構内出土を中心に扱った。



第2図 土層柱状図

2 遺構と遺物の分布

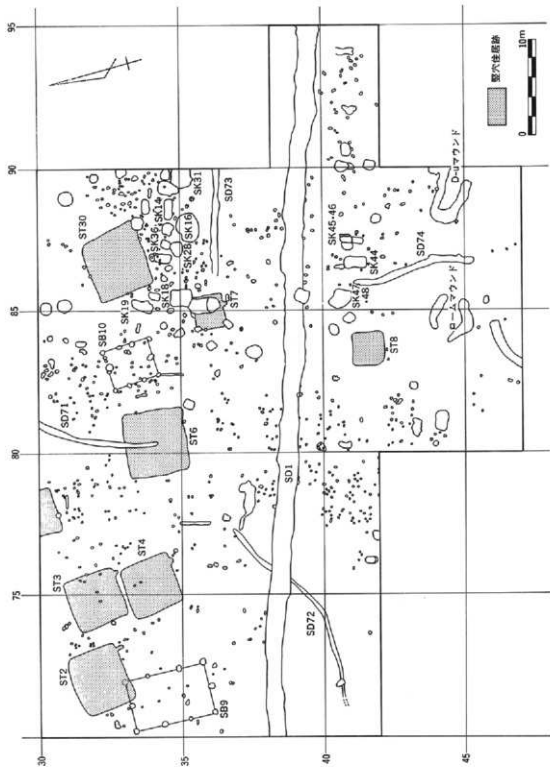
調査区内で検出された遺構は次のとおりである。掘立柱建物跡2、竪穴住居跡8、土壇35、溝跡5、柱穴250。

これらの遺構は主として東西に走るSD1の北側に集中している。これは、既述のように遺跡南側が寒河江川流路として砂礫層の堆積がみられ、集落を立地させるに不適当だったことに起因する。したがって、遺跡の中心は、今回の精査区域を南限とし、北へ広がるものと考えられる。竪穴住居、掘立柱建物跡は遺構各説で詳述するが、一定の方向性、規則性を有する。カマドの位置、方向についても同様であり、この点については、第IV章で河北町域の他の古代集落との比較で若干触れてみたい。また、土壇は主として精査区の北東に集中しており、柱穴（小柱穴）は、大半が竪穴住居や土壇より新しい時期のものとなる。

遺物は、全体で整理箱に約30個程出土した。大半が遺構内出土で、中でもSD1の覆土第2～3層中で大量の遺物が一括出土している。また、竪穴住居跡からは、明瞭なセット関係を有する遺物は出土していないが、本報告の中では、図示し得るものについては、極力図示するよう努めたが、住居跡内の破片資料は、点数のみ記載し、その傾向を把握するにとどめざるを得なかった。



第3図 遺跡全体図



第4図 遺構配置図

IV 遺 構

1 掘立柱建物跡 (SB)

9号掘立柱建物跡 (第5図 図版3)

70~72-32~36グリッドにおいて検出された南北棟の掘立柱建物跡である。梁行2間、桁行3間で、主軸方向は磁北より3°東に振れている。

アタリの芯々で測った柱間距離は桁行西側でEP1・4間が3.10m, EP4・6間が2.65m, EP6・8間が2.80m, 桁行東側で, EP3・5間が2.60m, EP5・7間が3.20m, EP7・10間が2.80mとなる。梁行北側ではEP1・2間が2.70m, EP2・3間が2.50m, 梁行南側ではEP8・9間が2.70m, EP9・10間が2.40mとなる。

掘り方は径あるいは一辺50~80cmの円形・楕円形・隅丸方形のプランで、深さは検出面から12~60cmであったが、抜き取りとみられる掘り込みをもつものも認められた。

アタリは、EP1・2・4・5・7・8・9・10で認められたが、柱根自体の遺存はみられない。

他の遺構との重複関係では、EP3とST2において、旧EP3→新ST2の関係が認められ、掘立柱建物跡が竪穴住居跡より古い時期のものであることが明らかとなった。

遺物はEP10掘り方より須恵器坏(SD1出土と接合、底部に「山」のへら描き)の他あかやき土器壺細片他が出土した。

10号掘立柱建物跡 (第6図 図版3)

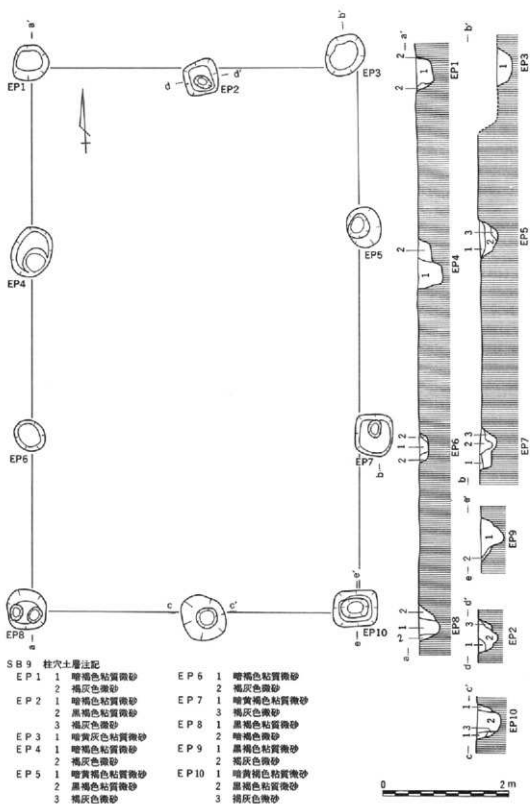
82~84-32~33グリッドにおいて検出された南北棟の掘立柱建物跡である。梁行2間、桁行3間で、主軸方向は磁北より東に2°掘れている。

柱は抜き取られたものもあり、アタリは明確ではないため、正確な柱間距離を測定することはできないが、桁行西側でEP9・8間が1.60m, EP8・7間も1.60m, EP7・6間が1.60m, 桁行東側で, EP1・2間が1.60m, EP2・3間が1.60m, EP3・4間が1.60mと、すべて1.60m等間である。梁行は北側EP9・10間が2.00m, EP10・1間も2.00m, 梁行南側EP6・5間, EP5・4間も2.00mの等間である。したがって、桁行・梁行ともそれぞれ等間の規則的な建物跡となる。

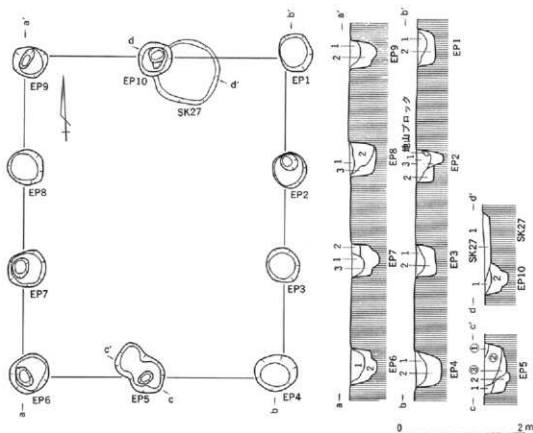
掘り方は径60~70m程の円形のプランを呈し、いずれも柱は抜き取られたものと考えられる。アタリについても、プラン、土層の観察からは不明瞭であった。

他の遺構との重複関係ではEP10とSK27とみられ、旧EP10→新SK27となる。

EP9から須恵器2片、土師器3片が出土した。



第 5 圖 9 号掘立柱建物跡実測圖



SB10 柱穴土層注記

- | | | |
|------|---|--------------------------------|
| EP 1 | 1 | 褐色粘土 (7.5Y R4/1) |
| | 2 | 黒褐色粘土 (7.5Y R3/1) |
| EP 2 | 1 | 褐色粘土 (7.5Y R4/1) |
| | 2 | 褐色粘土 (7.5Y R4/1) |
| | 3 | 黒褐色粘土 (10Y R3/1) |
| EP 3 | 1 | 黒褐色粘土 (7.5Y R4/1) |
| | 2 | 黒褐色粘土 (10Y R3/1) |
| EP 4 | 1 | 褐色粘土 (7.5Y R4/1) |
| | 2 | 黒褐色粘土 (10Y R3/1) |
| EP 5 | 1 | 黒褐色粘土 (10Y R3/1) |
| | 2 | 褐色粘土 (7.5Y R4/1) |
| | 3 | 黒褐色粘土 (10Y R3/1) |
| | ① | 褐色粘土 (10Y R4/1) |
| | ② | 褐色粘土 (10Y R4/1・
地山小ブロックを含む) |

- | | | |
|-------|---|---------------------|
| EP 6 | 1 | 褐色粘土 (7.5Y R4/1) |
| | 2 | 黒褐色粘土 (10Y R3/1) |
| EP 7 | 1 | 褐色粘土 (7.5Y R4/1) |
| | 2 | 地山小ブロックを少量含む |
| | 3 | 黒褐色粘土 (10Y R3/1) |
| | 3 | 黒褐色粘土 (10Y R2/1) |
| | | 地山砂 5~10cm次のブロックを含む |
| EP 8 | 1 | 褐色粘土 (7.5Y R4/1) |
| | 2 | 黒褐色粘土 (10Y R3/1) |
| | 3 | 黒褐色粘土 (10Y R2/1) |
| EP 9 | 1 | 褐色粘土 (7.5Y R4/1) |
| | 2 | 黒褐色粘土 (10Y R3/1) |
| EP 10 | 1 | 褐色粘土 (7.5Y R4/1) |
| | 2 | 黒褐色粘土 (10Y R3/1) |
| SK 27 | 1 | 褐色粘土質礫砂 (7.5Y R4/1) |
| | | 地山小ブロックを含む |

第6図 10号掘立柱建物跡実測図

ここで、9号掘立柱建物跡と10号掘立柱建物跡についてみる。両者とも南北方向に主軸をもち、前者は主軸がN-3°-E、後者はN-2°-Eとほぼ同一である。柱間距離、柱穴とも規模は9号掘立柱が大きく、10号掘立柱建物跡を凌ぐ。時期的には、後述する、「遺物」の項で詳述するが、9号についてはEP10の出土遺物とSD1出土遺物の接合関係および、2号竪穴住居跡との重複関係からある程度特定されよう。10号については、27号土壇との重複のみで、しかも出土遺物がないため特定できない。しかし、主軸の方向、各柱穴の埋土等からみた場合、この両者をセットとして把えることは概して不適当と思われぬ。→第四章 まとめ

2 竪穴住居 (ST)

本遺跡からは8棟の竪穴住居跡が検出された。ST 2・3・4・5・6・7・8・30である。この項では、主として遺構について記述し、各住居跡からの出土遺物については、次章で触れることとする。

なお、ST 7は、小竪穴遺構として扱えられるため、文章の記述にとどめたことを付記する。

2号竪穴住居跡 (第7図 図版6・7)

(位置・遺存状況) 71~73-31~33グリッドに位置する。第VII層上面で平面プランを確認した。遺存状況は良好である。

(平面形・規模・方向) 平面プランは隅丸長方形を呈する。東西にやや長く、東西6.60m、南北5.70m、カマドが南壁東側に構築されており、カマドを主軸にした場合、主軸方向はN-7°-Eを測る。

(壁) 壁は東側でやや緩やかな立上りを示すが、他は垂直に近い状況である。壁溝は、東壁南側、北壁~西側北側および、南壁の中央一部分で確認された。いずれも5~7cmの浅いものである。壁溝の断面はU字形を呈する。

(床) 第VII層を床としている。床面は黄褐色の粘土粒が固く踏みしめられており、覆土と容易に区別できた。

(柱穴) 床面で12検出されたが、本住居を構成すると考えられるものは図中EP 1~8までである。主柱穴はEP 1・5・6となるが、EP 2についてはEP 1の抜き取り痕とも考えられる。主柱穴以外では南壁際に小ピットが集中しており、何らかの柱あるいはそれに類する構築物が予想される。EP 9はカマド西側に設けられた小土壇で、黒褐色粘質微砂を主体に、特に上層に炭化物、焼土を大量に含んでいる。貯蔵穴状のピットと考えられる。住居跡外については、本住居跡に関連すると考えられる柱穴等は検出されない。

(カマド) 南壁東側で検出された。燃焼部と煙道部からなる。側壁は粘土構築で内面が特に焼けている。底面は若干窪められており、大量の焼土と、炭化物が認められ、焚口部分から住居跡床面には炭化物が2~5cm程の厚さで、40~50cmの範囲に広がっていた。土層観察では、天井部が落ちたと考えられる赤褐色粘土の焼土層が認められた。煙道は地山をほぼ水平に掘り抜いてつくられている。

(堆積土) 9層に分けられる。一部に地山ブロックを含む層がみられるが、人為的な埋め戻しが行われたとは考えにくい。

(出土遺物) 第V章参照

3号竪穴住居跡(第8図 図版8・9)

(位置・遺存状況) 73~76-31~32グリッドに位置する。第VII層上面でプランを確認した遺存状況は比較的良好である。

(平面形・規模・方向) プランは隅丸方形を呈し、東西5.60m、南北5.24m、カマドが南壁東側に構築されている。カマドを主軸にした場合、住居跡の主軸は、N-4°-Eを測る。

(壁) 南壁が比較的急に、他はやや緩やかに立上がる。壁溝・壁柱穴等は全く検出されない。

(床) 第VII層を床としている。床面は暗褐色土と黄褐色の粘土が固く踏みしめられている。(柱穴) 床面で6検出された。主柱穴はEP1・3・5と考えられ、EP2はEP3の抜き取りの痕とも考えられる。EK6は床面で検出されたが出土遺物はない。覆土および床面でのプラン検出状況から、本住居跡構築前の遺構と考えるより、付属の施設とみた方が妥当であろう。

(カマド) 南壁東端コーナーで検出された。煙道部は検出されない。側壁は東側で確認されたが西側は不明瞭である。燃焼部底面には焼土・灰・炭化物が堆積しており、底面は床を5cm程下げている。側壁は粘土構築である。

(堆積土) 8層に分けられる。主体をなすのは第6層で、少量の炭化物、地山ブロックを含むが比較的均質である。部分的に黒褐色土(第3層)、焼土ブロック(第3層)等が入る特徴がある。堆積の状況については不明な点が多い。

(出土遺物) 床面直上からRP71~73の3個体の土師器が出土している。いずれも、横位の状態である。第6層中より土錘が1点出土した。破片資料等については遺物の項で詳述する。

4号竪穴住居跡(第9図 図版10・11)

(位置・遺体状況) 73~76-32~35グリッドに位置し、3号竪穴住居跡と隣接する。第VII層上面でプランを確認した。遺存状況は良好である。

(平面形・規模・方向) プランは隅丸方形を呈し、東西5.40m、東北5.60mを測る。カマドは南壁東側に構築されており、カマドを主軸にした場合、主軸方向はN-6°-Eを測る。

(壁) 壁は比較的急に立上がる。壁溝は西壁中央で1.40m、北側中央~東側で3.10mの長さで確認された。幅10~15cm、床面からの深さ3cm程の浅いもので、断面はU字形を呈する。

(床) 第VII層を床としている。床面は固くしまっており、カマド周辺以外においても、若干の焼土、炭化物が認められた。床面中央に、東西90m、南北4.40mの方形の土色変化(黒褐色粘質土・少量の炭化物・地山小ブロックが混入する)がみられた。この部分が本住居

跡の第1期、その後拡張して第2期の住居跡として壁の検出されたものが構築された可能性が考えられる。

(柱穴) 床面で28検出された。主柱穴はEP1~4とする。主柱穴以外では北壁際には小柱穴が集中して検出されており、住居跡各コーナーのEP5・6, 7・8, 9と併わせて、何らかの支柱穴的な役割をもつものと考えられる。

(カマド) 南壁東側で検出された。燃焼部が認められたが、煙道部は検出されない。側壁は粘土極築で内面が焼けている。底面は若干窪められており、土層の観察では灰・炭化物層を挟んで2枚の焼土層が認められた。上層は天井が落ちたもの、下層は底面の焼土の堆積と考えられる。灰、炭化物は焚口部に約80~90cmの範囲で広がっている。カマド西側に貯蔵穴と思われる小土壌が設められた。

(堆積土) 8層に分けられる。上層は5~15cm程の暗褐色微砂が堆積しており、その下層から2~8の各土層が薄く堆積している。自然堆積と考えられる。

5号竪穴住居跡(第10図 図版12)

(位置・遺存状況) 77~78-30~31グリッドに位置する。第VII層上面でプランを確認した。西側で一部攪乱を受け、南壁で土壌に切られる。調査区の関係で北半部が未調査である。

(平面形・規模・方向) プランは隅丸方形を呈する。東西4.30m、東北は不明である。主軸方向はN-4°-Wを測る。

(壁) 壁は西側でやや緩やかに、東・南壁は比較的急に立上がる。壁溝は検出されない。

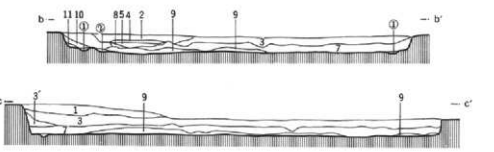
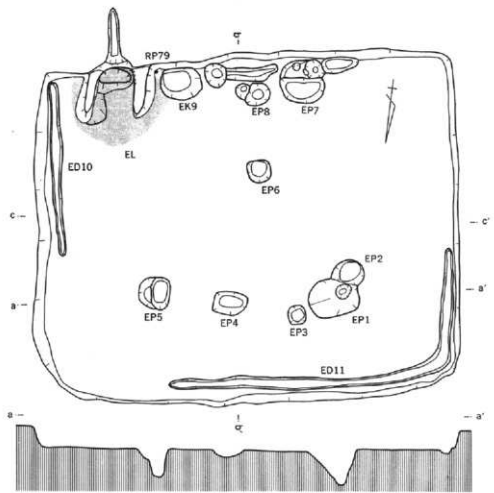
(床) 床面は黄褐色粘土と暗褐色土ブロックが混在し、固くしまっている。

(柱穴) 調査区内の床面では検出されない。

(カマド) 検出されない。調査区外の壁に構築された可能性があるが、本遺跡の他の竪穴住居跡を見た場合、ST6・8のように明らかにカマドを有さないものもあり、カマドの有無については不明である。

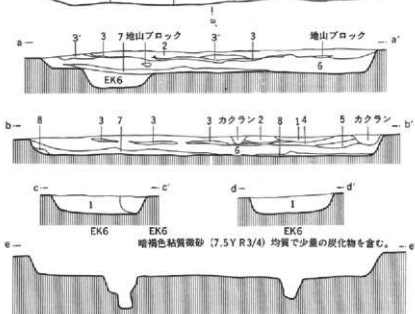
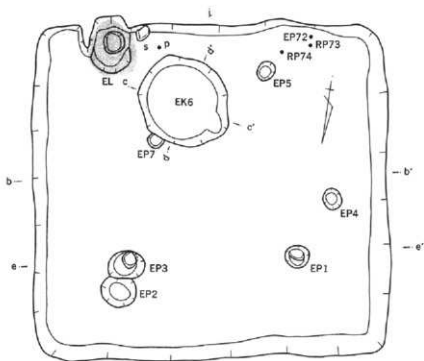
(堆積土) 3層に分けられる。基本的には1・3層が主体で、2層が間層として薄く入る。

(出土遺物) 第22・23図参照。図示したものは11点である。須恵器は蓋2点、坏3点、高台付坏2点を図示した。1点は回転糸切りの底部切離しだが、器形はヘラ切りの坏と類似する。あかやき土器は壺4点について図示した。第V章で詳述する。



- ST 2 土層注記
- 1 褐色粘質土 (7.5 Y R 4/1) 明々均質。炭化物も少量含む。
 - 2 赤褐色粘質土 (7.5 Y R 4/2) 均質。堆山小ブロックも少量含む。
 - 3 赤褐色粘質土 (7.5 Y R 4/1) に細広がる。炭化物の量は少ない。
 - 4 赤褐色粘質土 (2.5 Y 4/1) 炭化物、灰も薄く増殖する。粘土を含む。
 - 5 赤褐色粘質土 (2.5 Y 4/1) 炭化物ブロックが大きい。
 - 6 赤褐色粘質土 (10 Y R 3/1) 均質でまわっている。
 - 7 赤褐色粘質土 (10 Y R 3/1) 堆山ブロックの5~10cm大を大量に含む。
 - 8 赤褐色粘質土 (10 Y R 4/1) 均質。堆山ブロック2cm大を少量含む。
 - 9 赤褐色粘質土 (2.5 Y 4/1) 粘質。堆山ブロック5cm大を大量に含む。
 - 10 赤褐色粘質土 (10 Y R 3/1) 均質で粘質。
 - 11 黄褐色粘質土 (2.5 Y 4/3) 堆山 (壁) の崩壊土。

- ST 2 柱穴
- (深さ) (土色・土質)
- EP 1 52.0cm 褐色粘質土 7.5 Y R 4/1
 - EP 2 53.0cm 褐色粘質土 7.5 Y R 4/1
 - EP 3 15.0cm 褐色粘質土 10 Y R 4/1
 - EP 4 13.0cm 褐色粘質土 10 Y R 4/1
 - EP 5 34.5cm 赤褐色粘質土 10 Y R 3/1
 - EP 6 18.5cm 赤褐色粘質土 10 Y R 3/1
 - EP 7 18.0cm 赤褐色粘質土 10 Y R 3/1
 - EP 8 8.5cm 赤褐色粘質土 10 Y R 4/1
 - EK 9 43.5cm 赤褐色粘質土 7.5 Y R 3/1
 - ED 10 7.0cm 赤褐色粘質土 10 Y R 3/1
 - ED 11 5.0cm 赤褐色粘質土 10 Y R 3/1

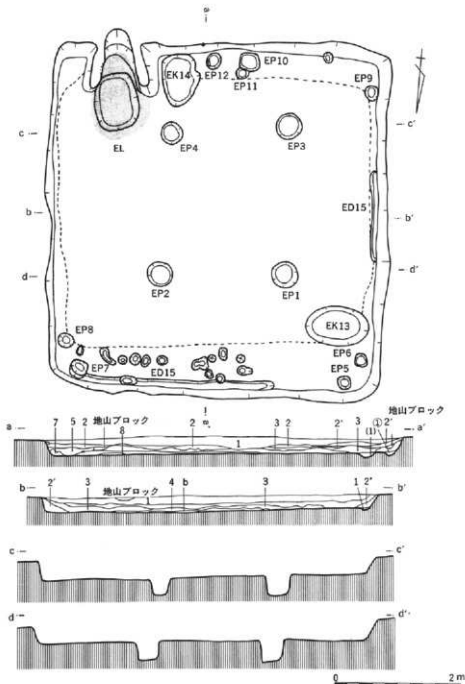


ST3 土層表記

- 1 灰褐色微砂(10Y R4/2)炭化物・粘土を含む。
- 2 褐色微砂(10Y R4/3)粘土質・5cm次の炭化物・地山ブロック10cmを含む。
- 3 黄褐色微砂(10Y R3/3)炭化物・炭を大量に含む。
- 3' 赤褐色土(5Y R5/4)粘土
- 4 暗褐色微砂(7.5Y R3/4)地山ブロック5cm。少量の炭化物を含む。
- 5 暗褐色微砂(7.5Y R3/4)地山ブロックの量が4に比し少ない。
- 6 灰褐色微砂(10Y R4/1)炭化物・地山ブロック2cmを少量含む。
- 7 灰褐色微砂(10Y R4/1)やや粘質がある。黄褐色ブロック2~3cmを含む。
- 8 黄褐色微砂(2.5Y 4/1)地山ブロック2~3cmを大量に含む。

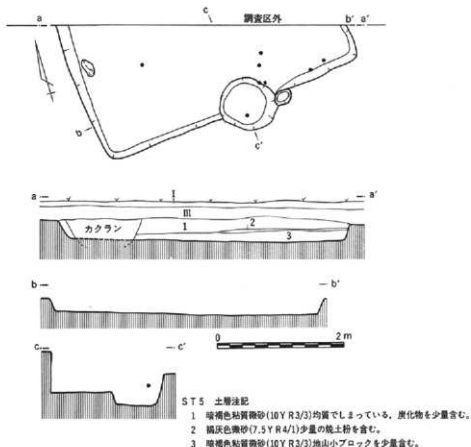
ST3 検穴

(深さ)	(土色・土質)	
EP 1 52.0cm	暗褐色土・暗褐色粘質土	10Y R3/3
EP 2 21.5cm	暗褐色土・地山ブロックを含む	10Y R3/3
EP 3 40.5cm	暗褐色土・地山ブロックを含む	10Y R3/3
EP 4 3.5cm	黄褐色微砂	10Y R3/1
EP 5 23.0cm	黄褐色微砂	10Y R2/1
EP 7 5.0cm	黄褐色微砂	10Y R3/1



- ST4 土層記
- 1 暗褐色 粘 砂 (10Y R3/2) 10cmの厚(土物・黄褐色小ブロックを含む。均質。
 - 2 黄褐色 粘 土 (10Y R3/2) 10cmの黄褐色ブロック・黄褐色少量を含む。
 - 3 黄褐色 粘 土 (10Y R3/2) 10cmの黄褐色ブロックを含む。
 - 4 黄褐色粘質砂 (10Y R3/2) 1-3cmの黄褐色・黄褐色土ブロックを散在に含む。
 - 5 黄褐色粘質砂 (10Y R3/2) 1に比し、黄褐色ブロックの量が少ない。
 - 6 黄褐色粘質砂 (10Y R3/2) 粘質が中心強く均質。黄褐色を多く含む。
 - 7 灰色 粘 質 砂 (10Y R5/2) 1) 地山ブロックの混入。
 - 8 灰色 粘 質 砂 (10Y R5/2) 地山ブロック。

- ST4 柱列表 (深さ) (土色・土質)
- | | | | |
|------|--------|--------------------|------------------|
| EP1 | 34.0cm | 暗褐色 粘 砂 (10Y R3/2) | 地山土・地山小ブロックを含む。 |
| EP2 | 32.0cm | 暗褐色 粘 砂 (10Y R3/2) | 下に1-3cmの厚の砂あり。 |
| EP3 | 32.0cm | 暗褐色 粘 砂 (10Y R3/2) | 大の地山ブロックを含む。 |
| EP4 | 25.0cm | 暗褐色 粘 砂 (10Y R3/4) | 灰色粘土ブロック状に含む。 |
| EP5 | 13.0cm | 暗褐色 粘 砂 (10Y R3/4) | 1-2cmの地山ブロックを含む。 |
| EP6 | 17.0cm | 暗褐色 粘 砂 (10Y R3/4) | 1-2cmの地山ブロックを含む。 |
| EP7 | 15.5cm | 暗褐色 粘 砂 (10Y R3/4) | 1-2cmの地山ブロックを含む。 |
| EP8 | 32.0cm | 暗褐色 粘 砂 (10Y R3/4) | 1-2cmの地山ブロックを含む。 |
| EP9 | 13.0cm | 暗褐色 粘 砂 (10Y R3/4) | 1-2cmの地山ブロックを含む。 |
| EP10 | 12.5cm | 暗褐色 粘 砂 (10Y R3/4) | 1-2cmの地山ブロックを含む。 |
| EP11 | 11.5cm | 暗褐色 粘 砂 (10Y R3/4) | 1-2cmの地山ブロックを含む。 |
| EP12 | 8.5cm | 暗褐色 粘 砂 (10Y R3/4) | 1-2cmの地山ブロックを含む。 |
| EP13 | 15.5cm | 暗褐色粘質砂 (10Y R3/2) | 均質でL型している。 |
| EK14 | 26.6cm | 黄褐色粘質砂 (10Y R3/2) | 10cmの厚の土ブロックを含む。 |
| ED15 | 3.0cm | 暗褐色 粘 砂 (10Y R3/2) | 地山ブロックを多く含む。 |



第10図 5号竪穴住居跡実測図

6号竪穴住居跡 (第11図 図版13・14)

(位置・遺存状況) 78～82-32～35グリッドに位置し、第VII層上面でプランを確認した。住居跡の壁版が4基の土壌により切られている。

(平面形・規模・方向) プランは隅丸方形を呈する。東西6.60m, 南北6.30m, カマドは不明のため短軸方向中心線を主軸とした場合、主軸方向はN-8°-Eを測る。

(壁) 壁は全体に急な立上りを示す。

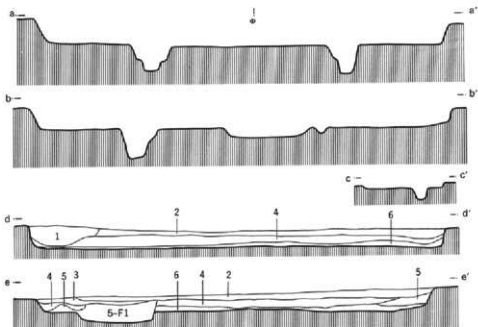
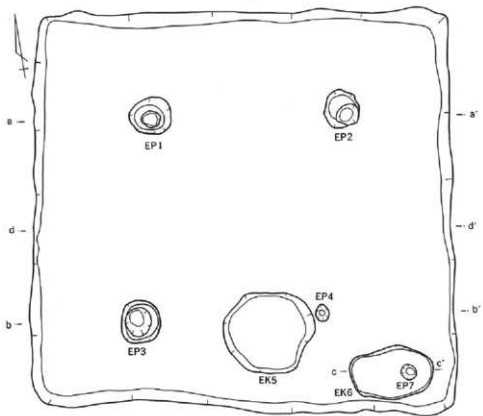
(床) 第VII層を床としている。黄褐色と暗褐色へが混在し、固くしまっている。

(柱穴) 床面で5検出された。主柱穴はED1～3で、床面から40～50cmと深く掘り方、アタリが明確である。

(カマド) 焼土・カマドとも検出されない。

(堆積土) 6層に分けられる。自然堆積か。

(出土遺物) 図示し得たものはない。第V章参照。

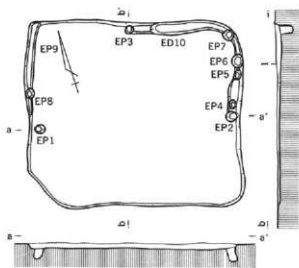


ST 6 土層記

- 1 暗褐色灰砂(7.5Y R3/4) 1cm大の暗褐色土、2cm大の地山ブロック、3-5cm大の黒色粘土ブロックを顆状に大量に含む。
- 2 黄灰色粘砂(2.5Y 4/1) 1cm大の地山ブロック、暗褐色土のブロックを少量含むが、全体に均質である。
- 3 灰色粘砂(7.5Y 4/1) 2-3cm大の地山ブロック、少量の灰化物を含む。
- 4 黒色粘質土(2.5Y 2/1) 粒径が強くしまっている。均質で他の土質は含まない。
- 5 暗灰色粘砂(2.5Y 5/2) 5cm大の地山ブロックを含む。
- 6 暗緑灰色粘土(10G 3/1) 粒径が強い。床面直上に全体に均質に堆積する。

土構 F1 黒色粘土(5Y 2/1) や中灰色気味の5cm大粘土ブロックを顆状に含む。





第12図 8号竪穴住居跡実測図

ST 6 土層法記
 1 暗灰黄色微砂(2.5Y5/2)
 暗褐色粘質微砂・黄褐色土の1~2cm穴
 がプロット状に混在する。

ST 8 柱穴
 (深さ) (土色・土質)

EP 1	17.0cm	暗褐色微砂(10Y R3/3)
EP 2	21.5cm	暗褐色微砂(10Y R3/3)
EP 3	20.5cm	暗褐色微砂(10Y R3/3)
EP 4	13.5cm	暗褐色微砂(10Y R3/3)
EP 5	6.0cm	暗褐色微砂(10Y R3/3)
EP 6	7.5cm	暗褐色微砂(10Y R2/2)
EP 7	6.5cm	暗褐色微砂(10Y R3/3)
EP 8	7.5cm	暗褐色微砂(10Y R3/3)
EP 9	3.0cm	暗褐色微砂(10Y R3/4)
ED 10	3.0cm	暗褐色微砂(10Y R3/4)

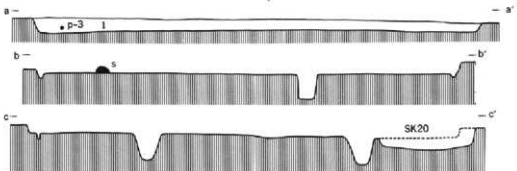
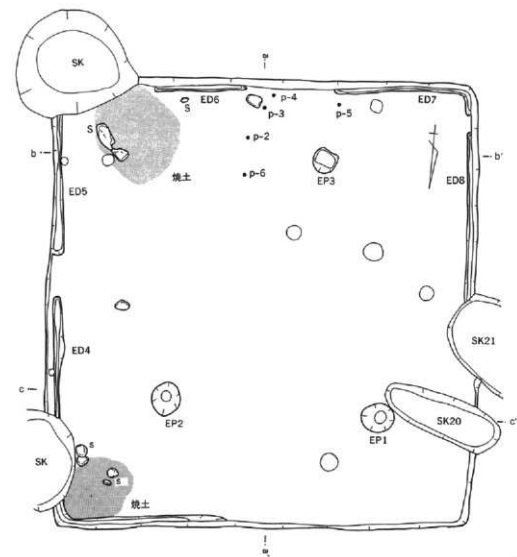
第8号竪穴住居跡 (図版15)

(位置・遺存状況) 82~84-41
 ~42グリッドに位置する。重複
 はないが削平されている。(平面
 形・規模・方向)不整隅丸方形を
 呈する。東西3.54m,南北2.90
 m,主軸はN-18°-E。

(壁) 急だが上面が削平されたと考えられる。立上りは5~10cm程である。(床) 黄褐色粘土が固く踏みしめられている。(柱穴) 壁際に8検出された。主柱穴はEP1~3で、EP1, 2は内傾する。壁柱穴に重複して西壁北側, 東壁~北壁に壁溝が認められる。(カマド) 焼土・カマドとも検出されない。(堆積土) 暗灰黄色微砂の単一層である。

30号竪穴住居跡 (第13図 図版16)

(位置・遺存状況) 85~88-31~32グリッドに位置する。第VII層上面でプランを確認した。遺存状況は壁付近で5基の土塊に切られているが、住居覆土, 床は比較的良好である。(平面形・規模・方向) プランは隅丸方形を呈する。東西6.80m, 南北7.15m, 主軸方向はN-6°-Wを測る。(壁) 壁は全体に垂直に近い急角度で立上がる。壁溝は北壁東端から南~西壁の南側まで一部途絶しながら巡る。(床) 暗褐色粘土を主体に固くしまっている。(柱穴) 上層からの柱穴を除き, 床面検出段階で3検出された。EP1~3のいずれも主柱穴と考えられる。壁柱穴・支柱等は検出されない。(カマド) 床面2地点で焼土および炭化物の薄い堆積が認められた。南壁東側と北西コーナーである。本遺跡の他のカマドを有する住居跡をみた場合, すべて南壁東側に構築されている。本体居跡の場合も, 南壁の焼土がカマドの痕跡と考えられる。新しい土塊と重複しており本体は失われている。(出土遺物) 図示したものは5点である。第V章参照。



ST 30土層注記
 1 暗褐色微砂(10Y R 3/3)全体に均質で、少量の地山ブロックを含む。

ST 30柱穴内

(深さ)		(土色・土質)			
EP 1	33.5cm	暗褐色粘質微砂(10Y R 3/3)	ED 5	10.0cm	暗褐色微砂(10Y R 3/3)
EP 2	42.0cm	暗褐色粘質微砂(10Y R 3/4)	ED 6	5.0cm	暗褐色微砂(10Y R 3/3)
EP 3	39.0cm	暗褐色粘質微砂(10Y R 3/4)	ED 7	6.5cm	暗褐色微砂(10Y R 3/3)
ED 4	12.0cm	暗褐色微砂(10Y R 3/3)	ED 8	5.5cm	暗褐色微砂(10Y R 3/3)

第13図 30号竪穴住居跡実測図

3 土 壤 (第14・15図 図版17・18・19)

土壌は調査区北東側および東側で集中的に検出され、西側ではほとんど検出されなかった。住居跡群と土壌群の区域が明確に分けられる分布状況を示している。ここでは、代表的な土壌を取り上げ、その概要を記述する。

13号土壌 88-33グリッドに位置する。楕円形を呈する。底面は平坦である。

14号土壌 88-34グリッドに位置する。a・bの重複で、新旧関係は新a→旧bとなる。aは自然堆積、bは1層である。遺物は出土しない。

15号土壌 87-88-34グリッドに位置する。底面は平坦で、やや急な立上りを示す。覆土は9層に分けられる。

16・17号土壌 87-88-34-35グリッドに位置する。中央で16号土壌が17号土壌とほぼ同じ深さで重複している。遺物は出土しない。

18号土壌 85-33-34グリッドに位置する。北側で柱穴に切られる。覆土は1層で、一時期に堆積した状況を示す。遺物は出土しない。

19号土壌 84-85-33-34グリッドに位置する。底面は平坦で、検出面からの深さは10cm程である。堆積状況は不明である。

28号土壌 86-87-34-35グリッドに位置し、プランはほぼ円形を呈する。覆土は3層に分けられるが、いづれも他の土質をブロック状に大量に含み、一時期に堆積した可能性が考えられる。

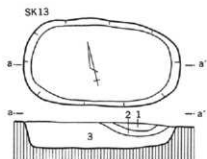
29号土壌 87-34グリッドに位置する。東・西側でやや緩やかに壁が立上がる。覆土は3層に分けられるが、いづれも他の土質をブロック状に含み、一時期に堆積した可能性が考えられる。

36号土壌 グリッドに位置する。黒色土ブロックを大量に斑状に含む単一層で一時期に堆積した様相を呈する。遺物は出土しない。

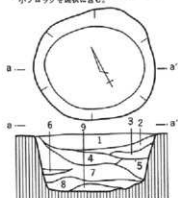
42号土壌 グリッドに位置する。a・bでは新a→旧bとなる。aは壁が急な立上りを示し、覆土にブロック状に他の土質を含むものの全体としては自然堆積の状況を示す。

47号土壌 グリッドに位置する。48号土壌と重複する。新旧関係は48→(347)となる。覆土は3層に分けられ、自然堆積と考えられる。

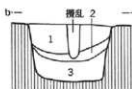
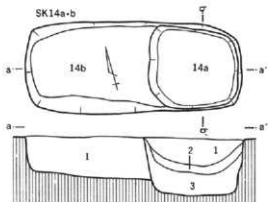
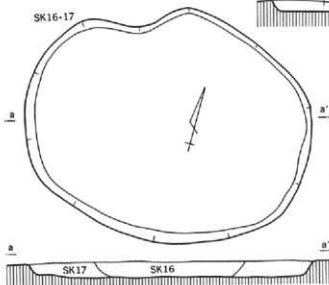
48号土壌、47号土壌と重複する。単一層である。壁は緩やかに立上がる。人頭大の礫が8点壁際に入る。底面では石臼の半欠が出土した。



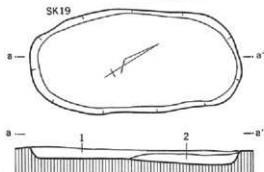
- SK13
 1 灰オリーブ粘質土 (5Y4/1)均質でしりがある。
 2 灰オリーブ粘質土 (5Y5/1)粘性強、黒色小ブロックを含む。
 3 灰色粘質黄土 (7.5Y4/1)黒色小ブロック、灰色小ブロックを塊状に含む。



SK16-17



- SK14a
 1 灰黄褐色粘質黄土 (10Y R5/2) 黒色粘土、灰色小ブロックを塊状に大量に含む。
 2 灰黄褐色粘質黄土 (10Y R6/2) 粘質や強、灰色ブロック5cm大を大量に含む。
 3 灰黄褐色粘質黄土 (10Y R5/2) 灰化物を若干含む。
 SK14b
 1 灰色黄土 (7.5Y4/1) 灰化物を若干含む。



SK15

- 1 褐灰色粘質黄土 (10Y R5/1) 灰色2cm大ブロック、1cm大黒色ブロックを塊状に含む。
 2 褐灰色粘質黄土 (10Y R5/1) 灰色5cm大ブロックを大量に含む。
 3 褐灰色粘質黄土 (10Y R4/1) やや黒味を帯びる、灰色粘土ブロック、黒色ブロックを含む。
 4 におい、黄褐色黄土 (10Y R5/3) 少量の灰色粘土ブロックを含む。
 5 黄灰色黄土 (2.5Y6/1) 少量の灰色粘土ブロックを含む。
 6 黄灰色黄土 (2.5Y6/1) やや黒味を帯びる。
 7 におい、黄褐色黄土 (10Y R5/3) やや黒味を帯び、灰色粘土の量が多い。
 8 黄灰色粘質土 (2.5Y4/1) 粘性強、均質である。
 9 緑灰色砂 (5G5/1) 砂質で若干の灰化物を含む。

SK19

- 1 灰黄褐色粘質黄土 (10Y R5/2) 灰色3cm大ブロック、黒色2cm大ブロックを大量に含む。
 2 褐灰色粘質黄土 (10Y R4/1) 均質で粘性強。

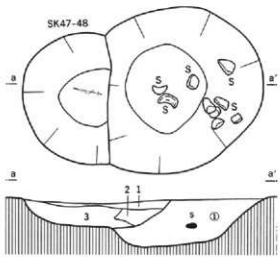
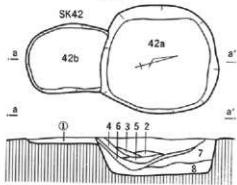
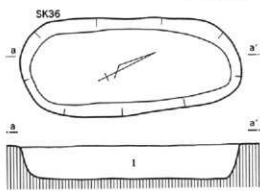


第14図 土壤実測図(1)



SK18
1 灰青褐色粘質微砂 (10Y R5/2) 灰色の30cm大ブロック、20cm大の黒色ブロックを大量に含む。

SK29
1 黄灰色微砂 (10Y R5/1) 褐色6/1と黒色粘土をブロック状(塊状)に大量に含む。
2 灰色粘質微砂 (5Y 4/1) 30cm大の青灰色砂ブロック、10cm大の黒色粘土ブロックを塊状に大量に含む。
3 暗褐色砂 (5B G/4/1) ブロックで含まれる。



SK28
1 黄灰色微砂 (10Y R5/1) 褐色6/1と黒色粘土をブロック状に大量に含む。
2 灰色粘質微砂 (5Y 4/1) 30cm大の青灰色砂ブロック、10cm大の黒色粘土ブロックを塊状に大量に含む。
3 灰色粘質微砂 (7.5Y 4/1) 30cm大の青灰色砂ブロック、10cm大の黒色粘土ブロックを塊状に大量に含む。

SK36
1 灰色微砂 (5Y 5/1) 10cm大の黒色粘土、1.2枚の黒褐色粘土を大量に含む。単一層で遺物は出土しない。

SK42 (42a)
1 黒褐色粘質微砂 (10Y R3/1) 1.2枚の炭化物、30cm大の黄褐色砂ブロックを含む。
2 灰色粘質微砂 (10Y R5/2) 炭化物、黒褐色土小ブロックを含む。
3 灰青褐色粘質土 (10Y R5/2) 2よりやや炭化物を多く含む。
4 灰青褐色粘質土 (10Y R4/2) 比較的均質、炭化物をほとんど含む。
5 石灰黄褐色粘質微砂 (10Y R5/3) 堆山ブロック。
6 灰青褐色粘質土 (10Y R4/2) やや暗く、炭化物を多く含む。
7 灰青褐色粘質土 (10Y R5/2) 黒色土、黄褐色土ブロックを多く含む。
8 灰青褐色微砂 (10Y R6/2) 均質、堆山に類似する土質である。

(42b)
1 褐色粘質微砂 (10Y R5/1) 均質で少量の炭化物を含む。

SK47
1 黄灰色粘質微砂 (2.5Y 4/1) 均質で粘性がある。
2 黄褐色粘質土 (2.5Y 3/1) 粘性強、堆山ブロックを少量含む。
3 黄褐色粘質土 (2.5Y 3/1) 炭化物、堆山ブロックを多く含む。

SK48
1 黄灰色粘質微砂 (2.5Y 4/1) 均質だが少量の堆山ブロック、炭化物層を縦断に含む。



4 溝跡

本遺跡では、溝跡は5基検出された。中でも調査区中央を東西に直線的に走る一号溝跡は、その覆土上層に大量の一括土器を含むこと。溝の北側と南側では遺構の分布状況が異なることなどから、本遺跡の時期・性格を探る上で重要な遺構となる。

1号溝跡(第16・17図 図版20・21)

37～39—70～94グリッドに位置し、直線的に走る幅2～2.2m、深さ80cm前後の溝跡である。方向はN—73°—Wを測る。壁は比較的緩やかに立上がり、底面は平坦だがやや丸味をもつ。覆土は11層が観察されたが、3層を境に大きく2つに分けられる。堆積の状況は、ある程度「溝」としての機能を有した後、3層(砂層)が一時期に堆積、その後、比較的短い期間に1・2層が堆積したものと考えられる。遺物は1～2層からのみ出土し、3層以下の層からは全く出土しない。これらの遺物はY軸75グリッドから79グリッドに集中しており、登録土器だけで72点を数える。出土状況は、溝の中央に散在・あるいは密集しており、堅穴住居跡覆土出土の遺物と接合するものもある。

本溝跡は、形状から人工的に構築された可能性が考えられる。すなわち、幅が一定で、直線的、底のレベルもほぼ一定であることなどの他、溝の南側では極端に遺構が希薄となる点などもその事由となろう。この点については後述することとする。

その他の溝跡

71号溝跡は幅30m、深さ10cm程の暗褐色微砂単一層で、ST6と重複する。新旧関係は旧ST6→新SD71となる。遺物は出土しない。SD72はSD1と旧SD72→SD71の関係をもち、幅20～25cm、深さ10～15cmの暗黄褐色微砂単一層の溝跡である。遺物は出土しない。SD73、74は重複関係のない溝跡で、両者とも幅30～35cm、暗褐色微砂単一層で遺物は出土しない。

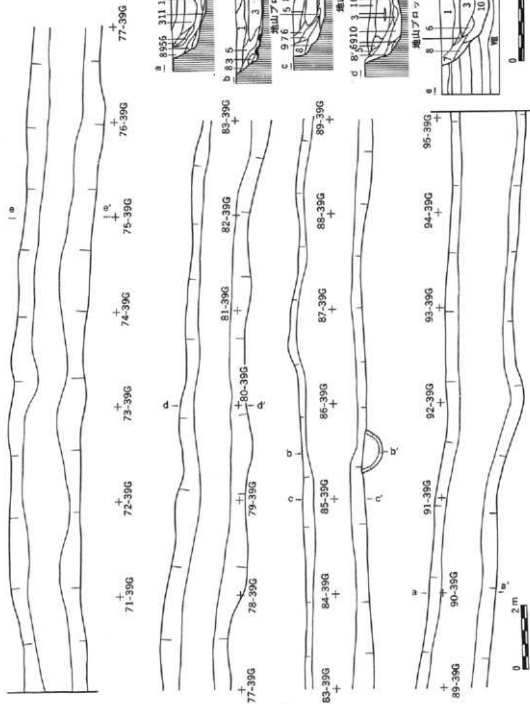
5 柱穴

全体で250程検出された。SB9・10を構成する柱穴の他は掘り方あるいはアタリが10～15cm程のものがほとんどで、検出面からの深さも数cm～50cmと種々である。覆土や掘り方からA：やや大形で灰色粘土を主体とする。B：黄灰色土を主体とする。C：A・Bの土質を斑状に含む。D：黒褐色土を主体とする。に分類ができる。柱列構成は不明である。

SD1 土層注記

- 1 灰褐色微砂(10YR4/1)炭化物、暗褐色小ブロックを少量含む。
- 2 灰色微砂(5Y4/1)若干の炭化物を含むが物質でしまっている。
- 3 褐色微砂(10YR4/4)粗い砂粒、均質で他の土質は含まない。
- 4 黄灰色微砂(2.5Y4/1)5mm～1cm大の地山小ブロックを少量含む。
- 5 暗黄褐色粘質微砂(2.5Y5/1)暗褐色土の小ブロックを少量含む。
- 6 灰黄粘質微砂(10YR4/2)5mm大の黒褐色土

- ブロックを少量含む。
- 7 灰色粘質微砂(7.5Y4/1)少量の地山ブロックを含むが比較的均質である。
- 8 黒褐色粘質土(2.5Y3/1)黒色土・地山小ブロックを斑状に大量に含む。
- 9 褐灰色粘質微砂(10YR5/1)土山ブロックを大量に含む。
- 10 黒褐色粘質土(2.5Y3/1)8と似る、均質で粘性が高い。
- 11 灰オリーブ砂(7.5Y2/2)地山小ブロックと暗褐色小ブロックを若干含む。



第16図 1号溝跡実測図

V 遺物

本遺跡から出土した遺物は整理箱にして総数30箱程であり、主に土器・土製品・石製品等が出土した。以下では、特に土器について分類し、概略的な説明を加える。基本的には、土師器 (I)、須恵器 (II)、あかやき土器 (III) とする。

1) 土師器 (I) 土師器には、坏 (A)、甕 (B) の器種が認められる。

坏 (A) 須恵器に比し出土量は圧倒的に少なく、図示したものは10点程である。製作技法は、すべてロクロ不使用、内・外面ともミガキ、ケズリがみられる。

A 1 類 (第25図54) 体部～底部資料1点のみの出土である。丸底で有段、外面は底部ケズリ、内面はヘラミガキ、黒色処理が施される。

A 2 類 口縁部～体部がやや内弯し、底部が平底のもの。a：内面に黒色処理が施されるもの (第25図55～60) b：黒色処理の施されないもの (第25図61) がある。

A 3 類 (第23図47) 口縁部～体部が内弯し、底部が丸底風の平底のもの。口径に比し器高が低く分量も小さい。器面調整は、外面が口縁部ヨコナデ、体部～底部がケズリ、内面はミガキで黒色処理が施される。

甕 (B) 酸化焰焼成で、基本的にはハケ目・ケズリ等の器面調整が施されているものである。「あかやき土器」との関連については第VI章で後述する。

B 1 類 口縁部が外反し、胴部上半～中央が膨らむもの。a：口縁径が器高を上まわる (第25図63)。b：器高が口縁径を上まわるもの (第21図27・第25図64)。c：頸部がく字状に屈曲し、胴部上半に最大径を有するもの (第25図62)。

B 2 類 口縁部が外反し、長胴のもの。a：口縁部が大きく外反し、胴部は頸部から緩やかに底部へ至る (第18図2、第19図11)。b：胴部上半がやや脹らみをもつ (第19図12)。

2) 須恵器 (II) 須恵器には蓋 (A)、高台付坏 (B)、坏 (C)、壺 (D)、甕 (E)、横瓶 (F) の各器種がある。

甕 (A) つまみ部と天井部の形態から4類に分類され、さらに成形・調整から細分される。天井部はいづれも回転ヘラ削りの痕跡を残す。

A 1 類 つまみ部の中央が突出し、宝珠形となるもの。a：口縁径が大きく天井部は平坦となる (第26図66)。b：つまみ部が低く、口縁径が136～150前後のもの。身の浅深で、b 1 類 (第26図68)、b 2 類 (第26図67・69) に分けられる。c：つまみ部の突出がやや緩やかで、身はやや深い (第21図28・第26図70)。

A 2 類 つまみ部中央の突出が顕著ではないが若干突出する (第21図29・第22図37・第

26図72)。身の浅深では72と29・37に細分が可能である。いずれも天井部が平坦で回転ヘラ削り痕を明瞭に残す。

A 3類 つまみ部は突出がなく全体にくぼむ。天井部の形態により、a：平坦で回転ヘラ削り痕を明瞭に残す(第26図71・73)。b：天井部がゆるい丸味をもつ(第22図36)。に分けられる。

A 4類 つまみ部が大きく全体にくぼみ、身が深いもの(第19図15)。

高台付環(B) すべて回転ヘラ切り手法による切り離しで付高台である。形態・法量等により以下に分けられる。法量については口径/器高×100(指数)を目安としているが、分類にあたっては口径の絶対値も考慮した。ただし、ここでは形態を主に分類した。指数では300以下・301~330・331以上の3群に分けられるが、特に300以下と301~330に集中する傾向がある。

B 1類 口径124mm以下で指数300以下のもの。形態的には、底部から体部にかけてやや丸味をもち、口縁部に向かい直線的に外反する。a：指数が300に近いもの(第32図159)。b：指数260~280の範囲に入るもの(第21図32, 第22図41・42, 第32図157・162・164)。なお、164は若干内弯気味に立上がる。

B 2類 口径125~150mmで指数が300以下のものを中心とし、さらに形態を加味して指数をやや広くとる。a：体部下半に稜が形成され、口縁部が大きく外反するもの(第32図155・158, 第37図192)。b：体部下半に緩い稜が形成され、口縁部にかけてやや直線的に立上り、口縁部が多少外反する(第18図4, 第32図153, 第33図168)。指数は330まで広げて考える。c：指数が250前後で法量が大きく上記a・bからはずれぬもの。c 1：底部から口縁部まで直線的に立上がる(第33図167)。c 2：底部から口縁部まで緩やかに内弯しながら立上がる(第33図169)。

B 3類 口径125~155mmで指数が301以上のもの。形態によりa・bに分けられる。a：底部から口縁部まで丸味をもちながら内弯して立上がる(第32図154・160・161, 第33図166)。b：底部から口縁部までやや直線的に広がりながら立上がる(第20図23・24, 第33図165)。

環(C) 底部の切り離しからヘラ切りと糸切りに大別され、さらにその法量や形態から細分される。

C I類 底部の切り離しがヘラ切りのもの。口径/器高×100を指数としてC I 1類~3類に、さらに口径からa~c類に、さらに形態等から1~3類に細分できる。なお、環は、ナデ等の調整を除く再調整は認められない。

C I 1類：指数330以下のもの。**C I 2類**：指数331~420のもの。**C I 3類**：指数421以上のもの。さらに、口径から、a：口径124mm以下、b：125~150mm、c：151mm以上に分

けられる。さらに、a・b・cの下位（便宜上）として、1：底部から口縁部が比較的直線的に急な角度で立上がるもの。2：口縁部がやや外反しながらひらき気味に立上がるもの。3：底部から口縁部に向かい内湾しながら立上がるもの。4：底部から口縁部への立上がりが緩やかで、大きくひろくもの。

C II類 底部の切離しが糸切りのもの。点数は全体で4点と極めて少ないため一括して扱う。

壺(D) 長頸壺・短頸壺を認める。

D I類 長頸壺を一括する。長い頸部から口縁が外反して立上がる。肩の張る形態が推測できる。

D 2類 短頸壺を一括する。やや外反しながら頸部が立上がる。

甕(E) 小形の広口の甕といわゆる大甕類とに分けられる。

E 1類 小形の広口の甕で、成形技法、形態があかやき土器の器種と共通する点が多い。

E 2類 大形の甕を一括する。復元実測を含め完形品はない。すべて破片あるいは口縁部資料である。打圧調整のタタキとアテの組合せでは、平行タタキと同心円ないし青海波(53・174・182)、平行タタキと無文のアテ(5・173・178)、平行タタキと格子目状アテ(180・181)、綾形状タタキと無文のアテ(179)などのバリエーションが認められる。

E 3類 口縁部に最大径をもつ。体部は上半でやや膨らむ。176は体部外面ケズリ・内面が細かいハケ目がみられる。

横瓶(F) 破片資料が2点出土した。一括して扱う。183はタタキ後にカキ目、184はカキ目がみられる。両者とも無文のアテ痕が残る。

硯(G) 1点出土した。資料は破片資料のため復元実測による図示である(第37図193)。視面は水平で陸と海の区別はないものと考えられる。有孔の圈足をもつため、「圈足円形硯」とみられる。

3) あかやき土器 (III)

甕に限られる。形態・技法等により以下のように分類した。

甕(A)

A 1類 大形の甕で口径が小さく体部中央に最大径をもつもの。図示したものは完形の52のみである。外面は、体部上半がカキ目、下半はタタキが認められる。内面はカキ目、下半でハケ目による調整がみられる。

A 2類 中形～小形の甕で最大径が口縁部あるいは口縁部径と体部最大径が近似するものを一括する。調整技法、口縁部形態等により細分される。a：頸部が「く」の字状に屈曲し、体部外面がカキ目、ハケ目、あるいはケズリの調整が、内面は主にハケ目による調

整が施される (25・185)。b：頸部が「く」の字状に屈曲し、体部外面は部分的にカキ目、ケズリ調整がみられる他はハケ目、タタキ等が施されない (45・51・180・187)。

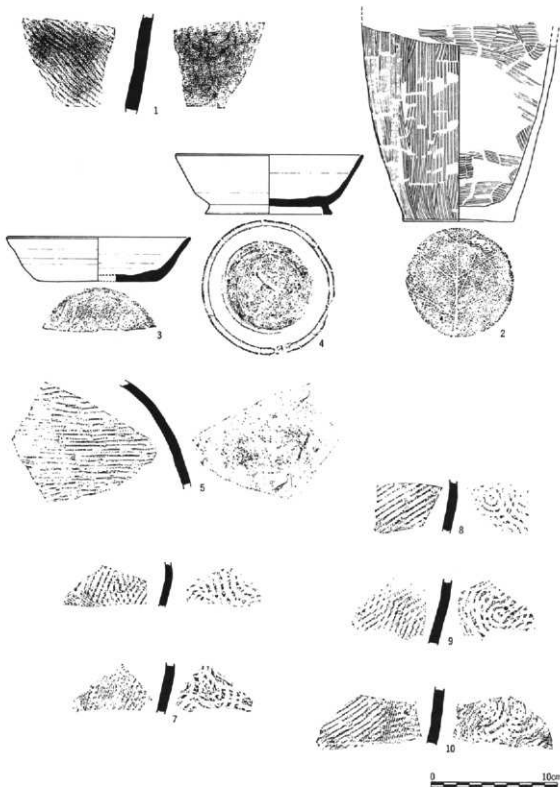
A 3類 長胴の甕を一括する。a：頸部から口縁部が外反し、口縁部は直立気味に立つ。体部外面は上半でタタキ、下半～底部にケズリがみられる (34・43)。丸底の26も含める。b：頸部が「く」の字状に屈曲する。体部外面にはハケ目、ケズリ、内面にハケ目の調整がみられる (35・44, 46・49)。c：頸部から口縁部が外反し、口縁部がやや直立する。図示した資料は50の1点である。体部外面は主にケズリ、内面は平行のカキ目となる。

4) 土製品・石製品 (第38図)

土製品では土錘が2点出土した (195・196)。いづれも手捏ねによって成形されている。石製品では、砥石が3点出土した。197・198は小型、199は大型である。3者とも欠損している。小型の2点は凝灰岩質の砥石で全面が砥磨面となる。198はS T 6出土である。199は安山岩製でやはり全面が砥磨面となる。

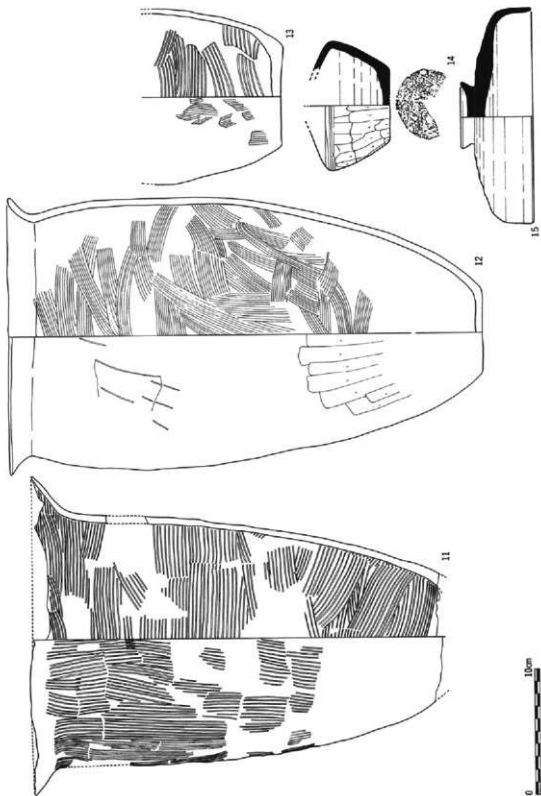
表-1 須恵器環 (ヘラ切り) 分類集成一覧

口径 形態 指数	a (口径124mm以下)				b (口径125~150mm)				c (口径151mm以上)			
	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4
C I 1 (指数330以下)	1	0	1	0	0	4	0	1	0	0	1	0
C I 2 (指数331~420)	3	0	1	0	10	18	18	0	0	6	0	0
C I 3 (指数421以上)	0	0	1	0	6	1	2	3	1	2	0	1



1: SB9 2~7: ST2 8~10: ST3

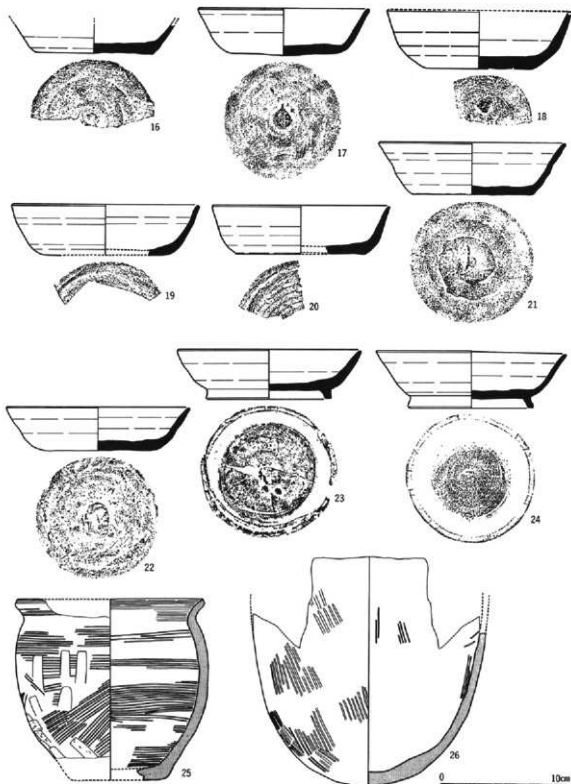
第18图 出土土器实测图·拓影图



第19圖 出土器実測図(2)

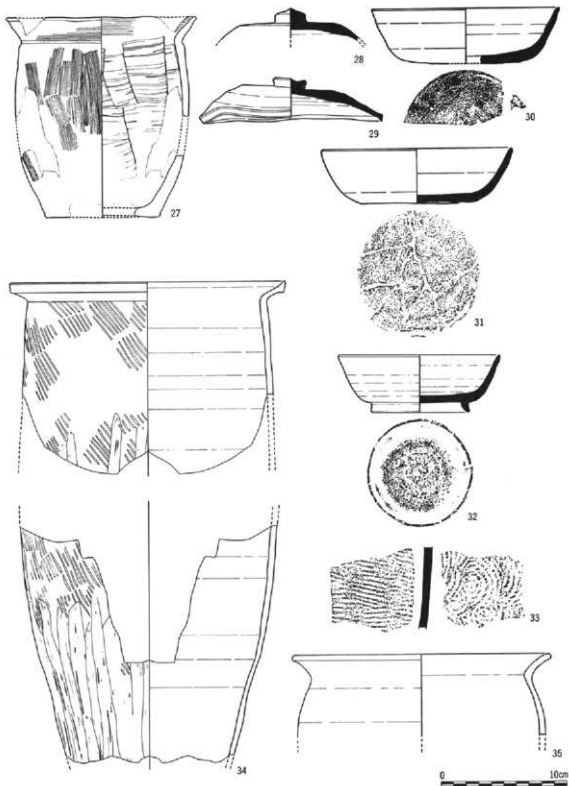
0 10cm

11~15: ST 3



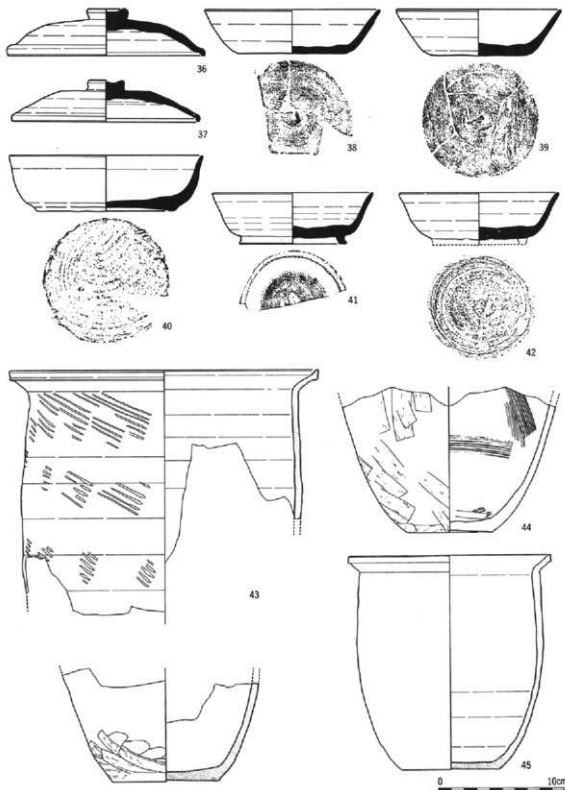
16~26: ST 3

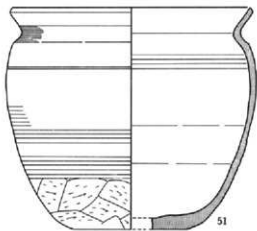
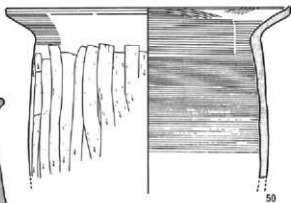
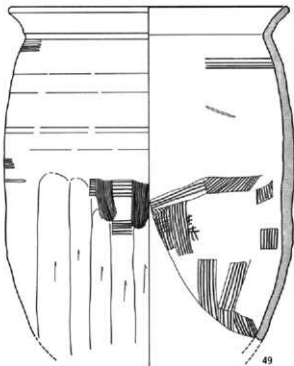
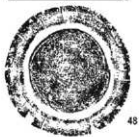
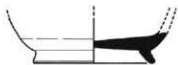
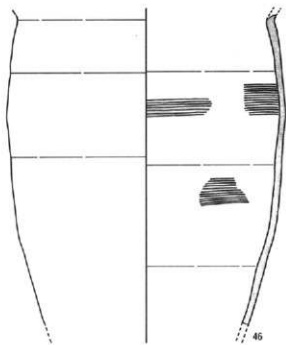
第20圖 出土土器実測圖(3)



27-35: ST 4

第21圖 出土土器実測圖・拓影圖(4)

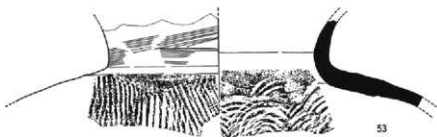
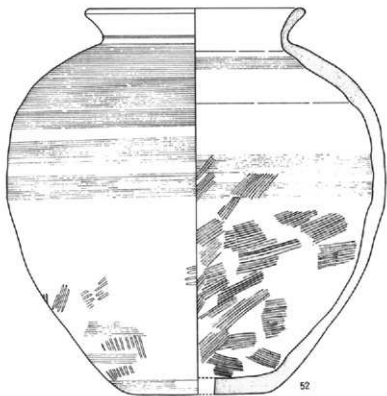




0 10cm

46: ST 3 47~51: ST 30

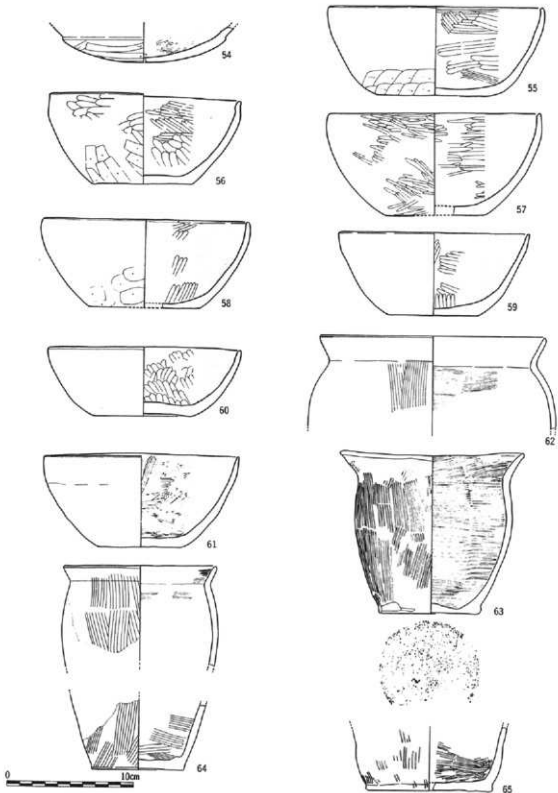
第23图 出土土器实测图(6)



52: S T 30 53: S K 48

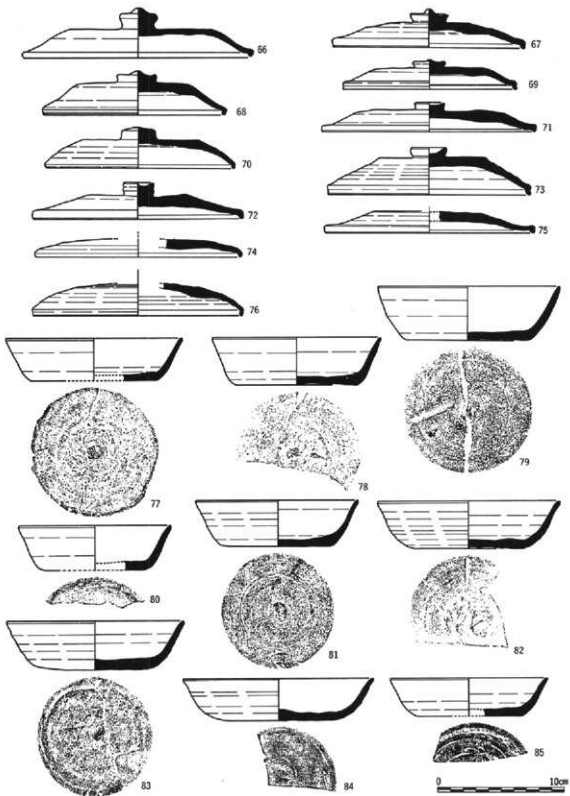
0 10cm

第24图 出土土器実測图(7)



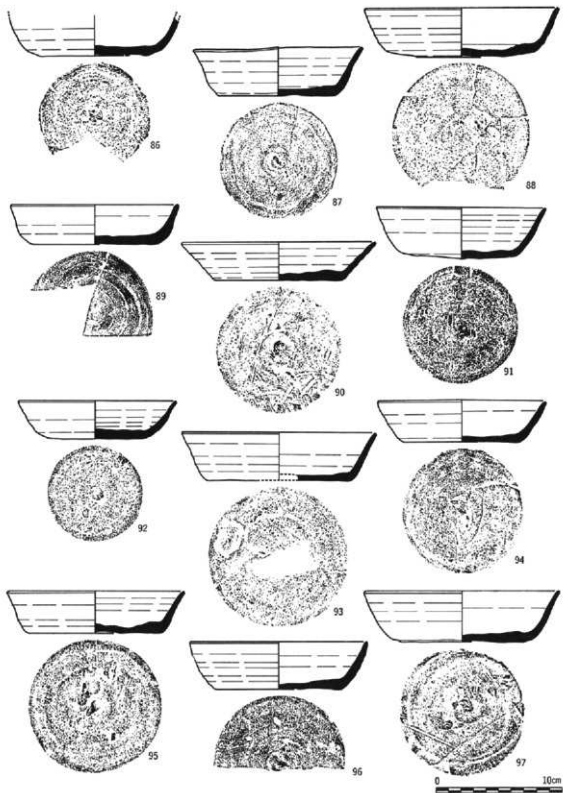
SD1出土(1)

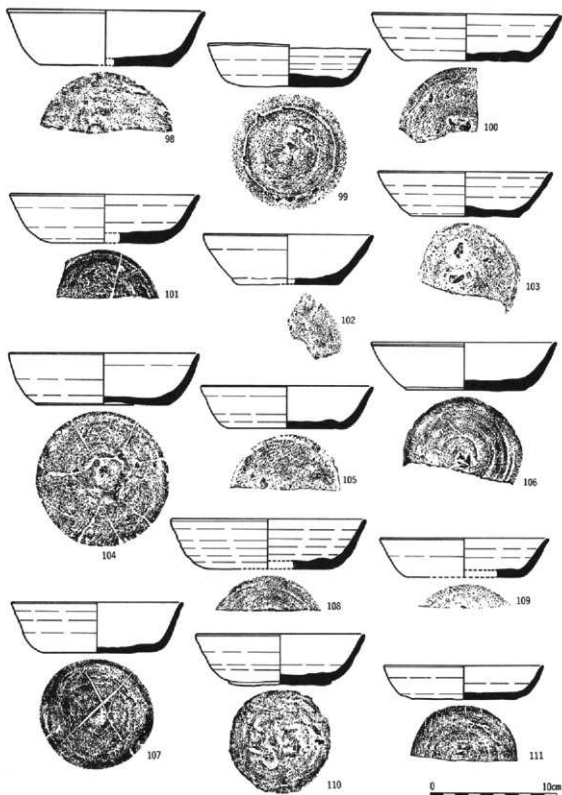
第25圖 出土土器実測圖(8)



SD1出土(2)

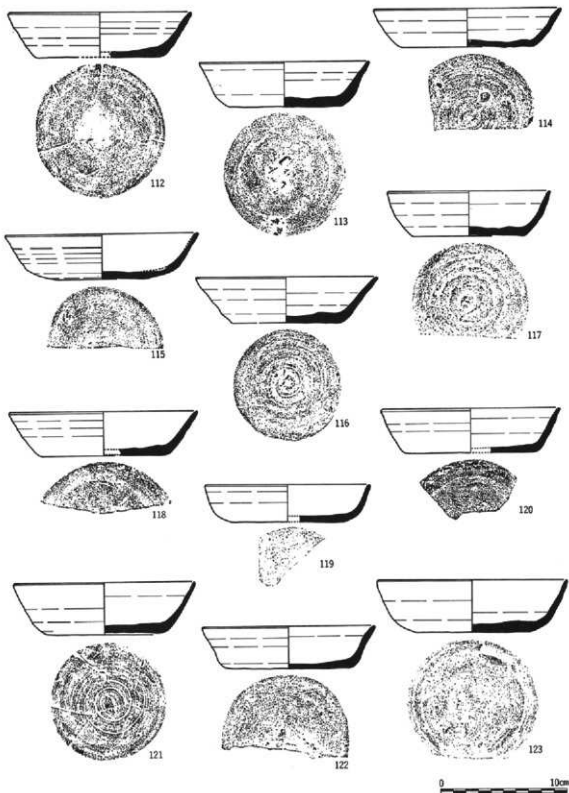
第26图 出土土器实测图(9)

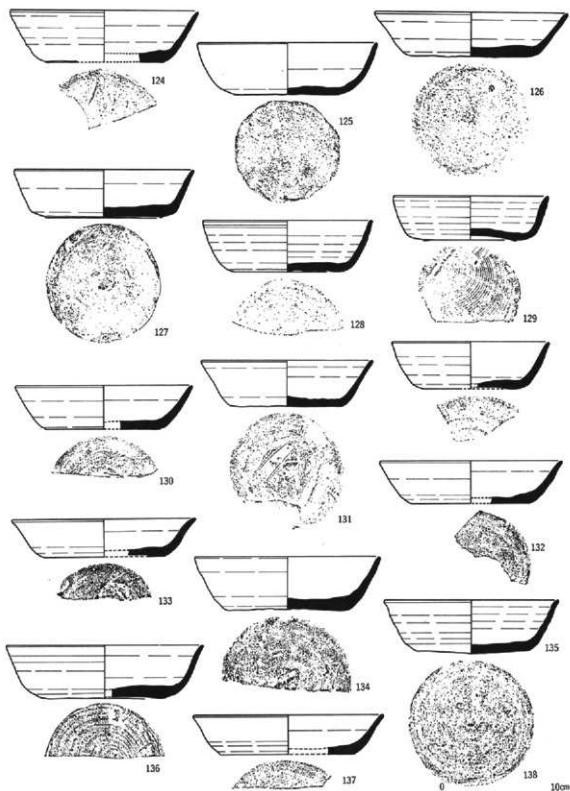


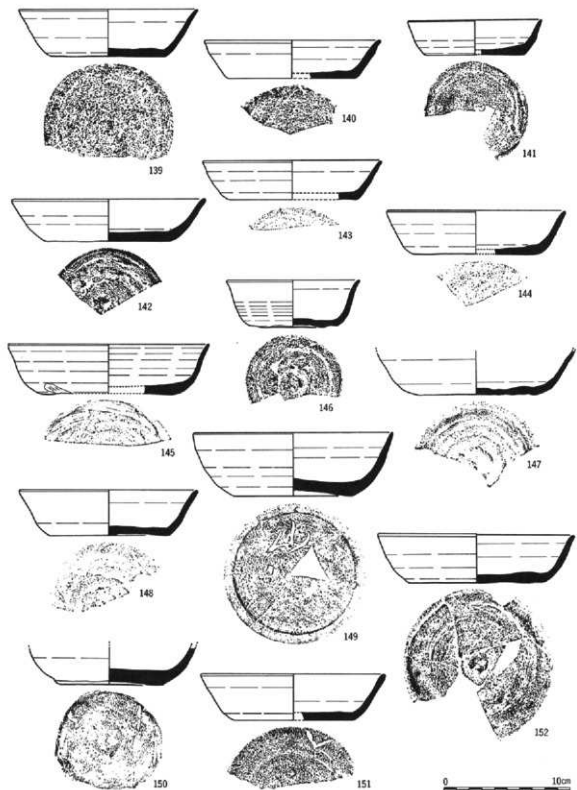


SD1出土(4)

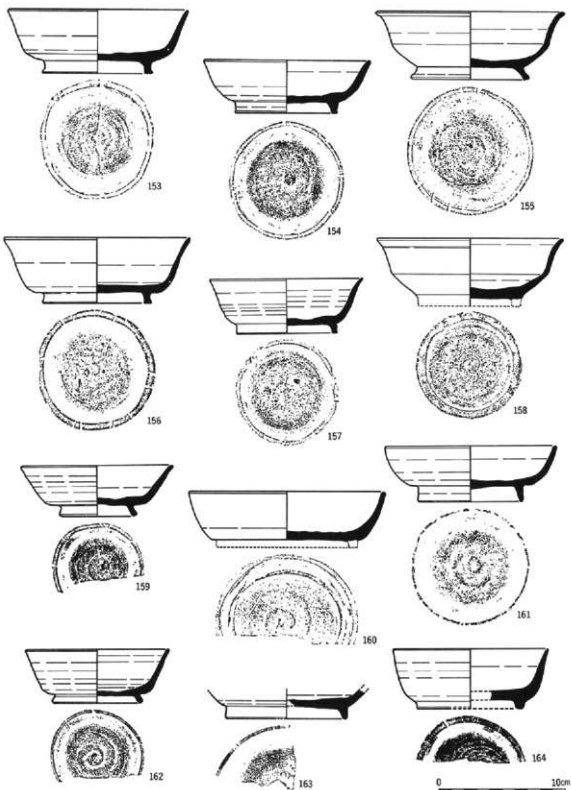
第28图 出土土器实测图(11)

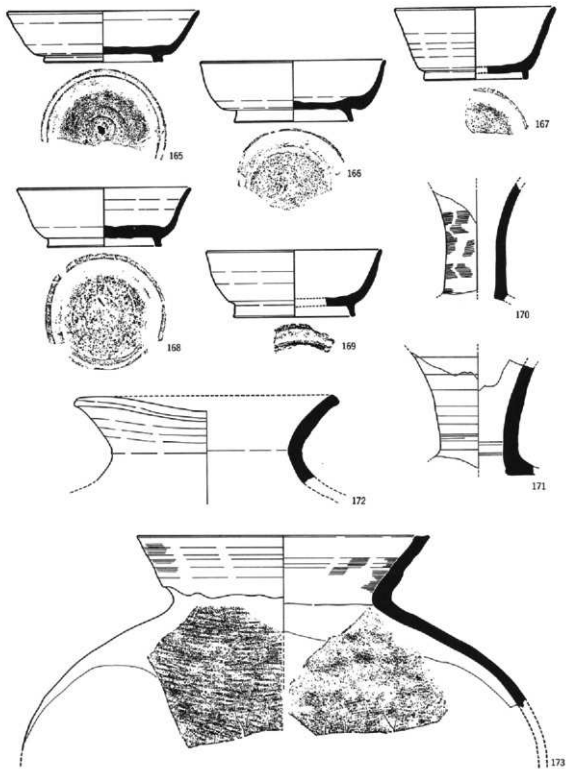






SD1出土(7)

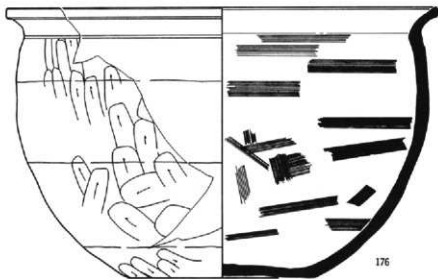
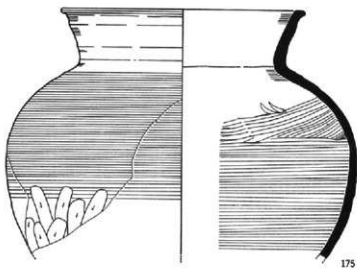
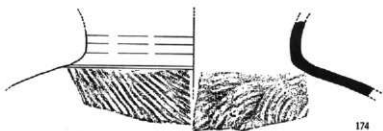




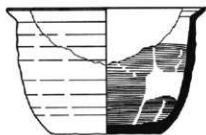
SD1出土(9)

第33图 出土土器实测图(16)

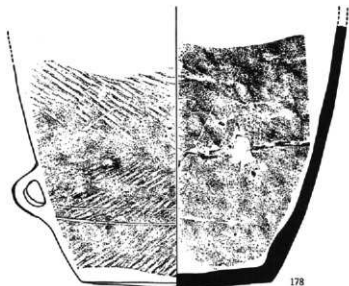
0 10cm



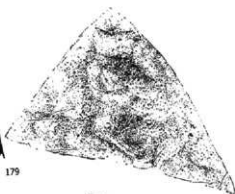
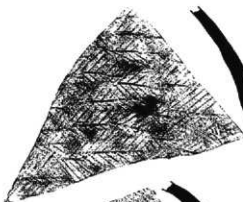
0 10cm



177



178



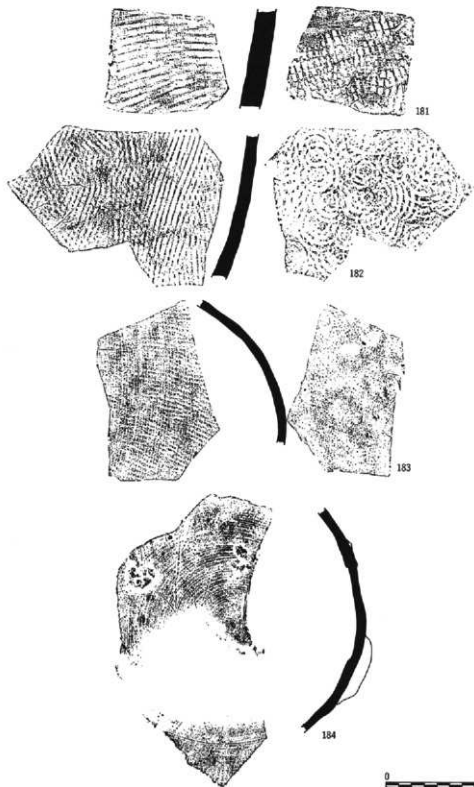
179

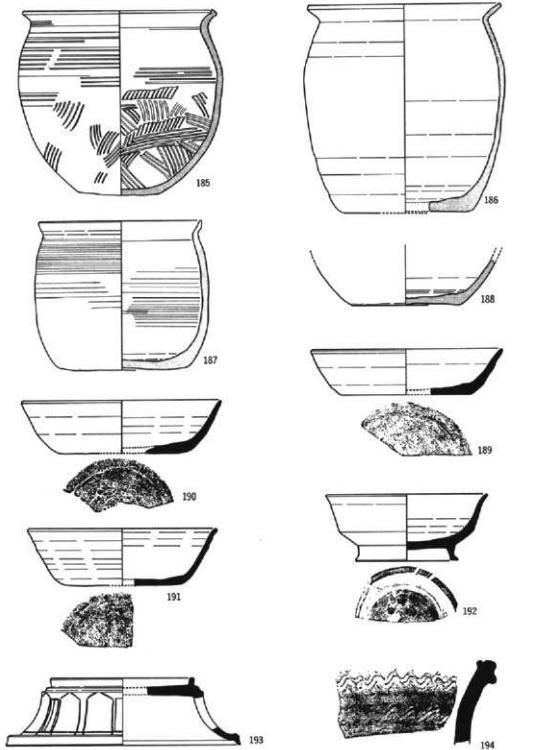


180



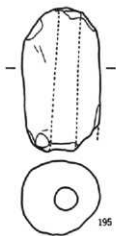
SD1出土 (11)



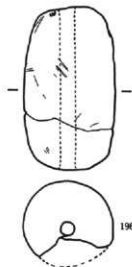


185~188 : S D 1 出土 (13) 189~194 : 包含層出土

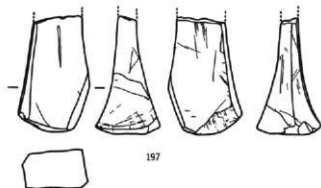
第37圖 出土土器実測図・拓影図 (20)



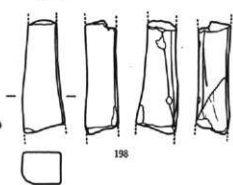
195



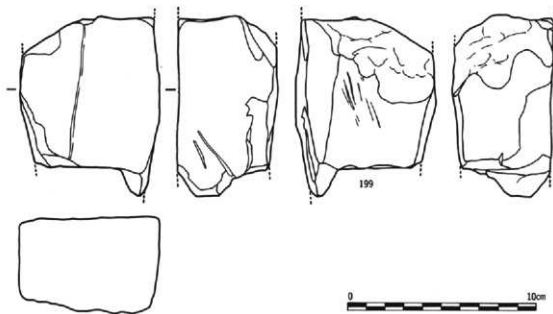
196



197



198



199



第38圖 出土土器・石製品実測圖



I A1(54)



I A2a(55)



I A2a(60)



I A2a(57)



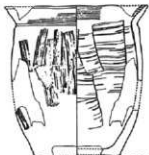
I A2b(61)



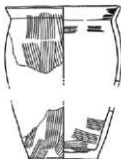
I A3(47)



I B1a(63)



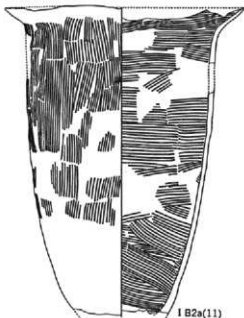
I B1b(27)



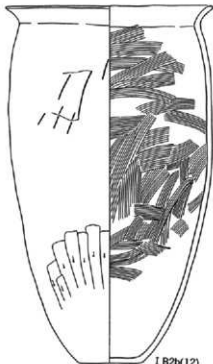
I B1b(64)



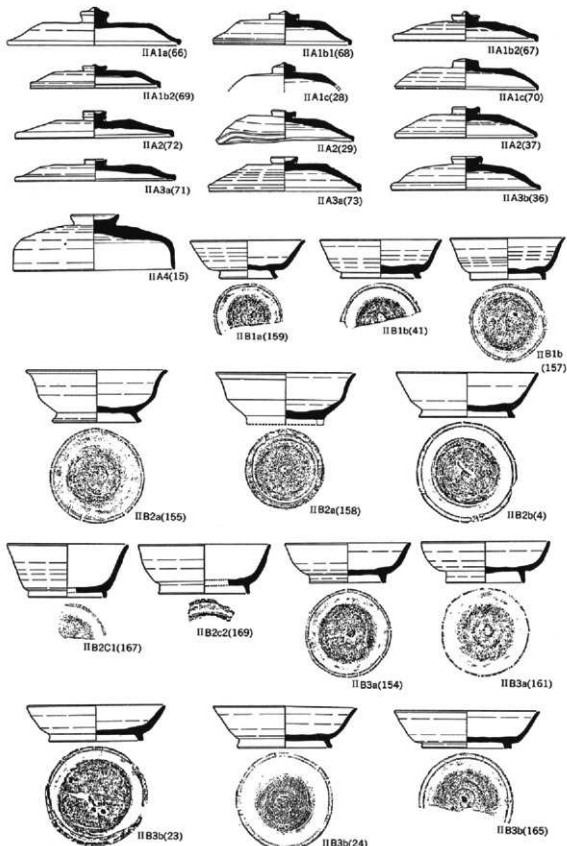
I B1c(62)

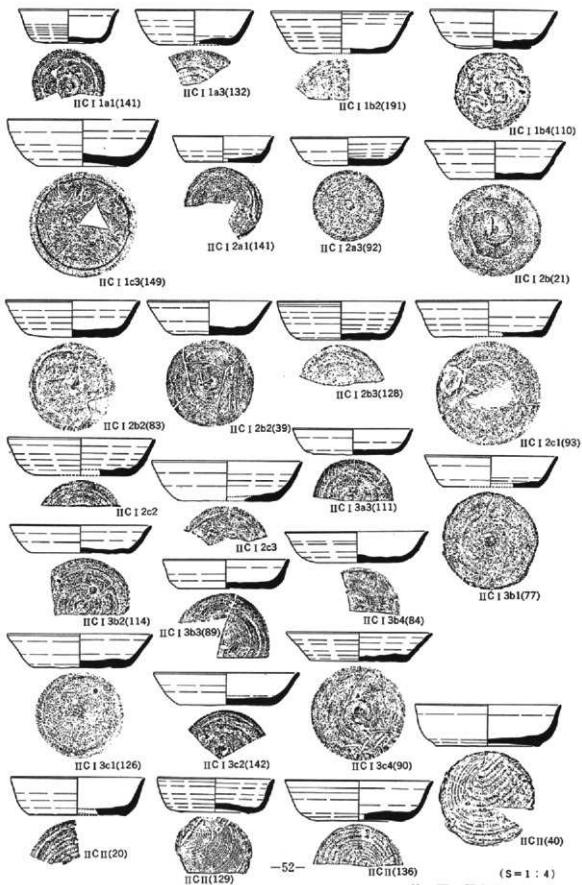


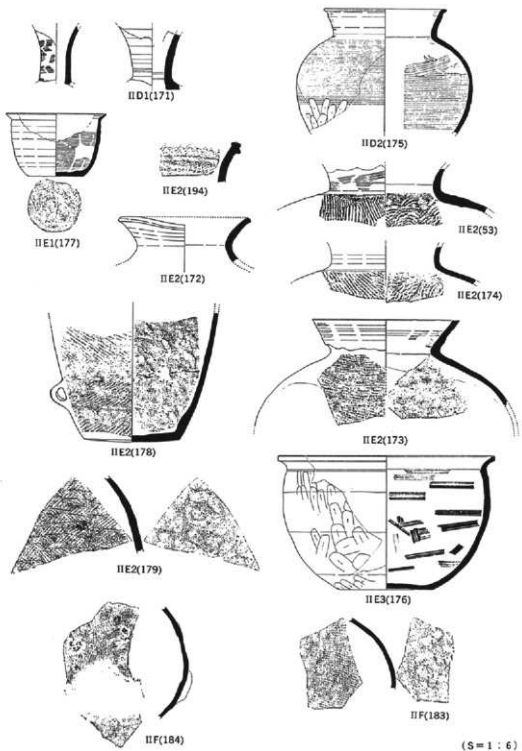
I B2a(11)



I B2b(12)

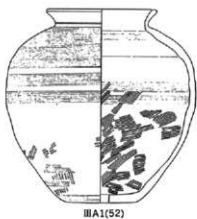






(S = 1 : 6)

第42圖 須惠器壺・甕・横瓶分類圖



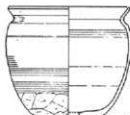
IIIA1(52)



IIIA2a(25)



IIIA2a(185)



IIIA2b(51)



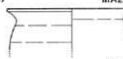
IIIA2b(186)



IIIA2b(187)



IIIA2b(45)



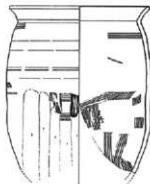
IIIA3b(35)



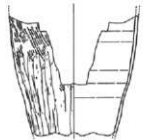
IIIA3a(34)



IIIA3a(43)



IIIA3b(49)



IIIA3a(34)



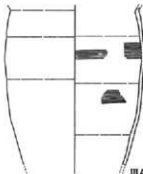
IIIA3a(43)



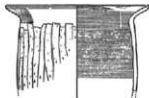
IIIA3b(44)



IIIA3a(26)



IIIA3b(46)



IIIA3c(50)
(S = 1 : 6)

第43図 あかやき土器分類図

表-2 遺物観察表(1)

押印	遺物 番号	器 種		計測値(mm)			底 部 切 離	調 整 技 法 ・ 色 調	出土地点	分 類		
		口径	底径	器高								
第 18 団	1	須恵器	甕					タタキ		SB9	II E2	
	2	土師器			88	(158)	木 葦 痕	ハケ目	橙 色	ST2	I B2a	
	3			坪	144	92	35	ヘ ラ 切			II C 1 2b2	
	4			高台付坪	147	99	47	#		明 青 灰 色	#	II B2b
	5								タタキ	青 灰 色	#	II E2
	6	須恵器							タタキ	青 灰 色	#	#
	7								タタキ	青 灰 色	#	#
	8								タタキ	青 灰 色	ST3	#
	9								タタキ	青 灰 色	#	#
	10								タタキ	青 灰 色	#	#
第 19 団	11			250		(326)		ハケ目 底部欠損	橙 色	#	I B2a	
	12	土師器		210	62	374		ハケ目・ケズリ	にぶい黄褐色	#	I B2b	
	13				75	(102)		ハケ目	にぶい黄褐色	#	I B2a	
第 20 団	14		小形壺		53	(60)		ケズリ	灰 色	#	II D1	
	15		蓋	169		57	ヘ ラ 切		灰 色	#	II A	
	16				93	(22)	#		青 灰 色	#	II C1	
	17			134	87	37	#		灰 白 色	#	II C1	
	18			(144)	82	(42)	#		灰 白 色	#	II C1 2b3	
	19	須恵器	坪	146	102	40	#		灰 白 色	#	#	
	20			129	99	39	#		青 灰 色	#	II C II	
	21			146	95	41	#		暗 青 灰 色	#	II C 1 2b1	
	22			143	74	35	#		灰 白 色	#	II C 1 2b2	
	23			144	98	39	#		青灰/暗青灰色	#	II B3b	
24		高台付坪	149	97	45	#		明 青 灰 色	#	#		
25	あかやき			146	(70)	143		ロクロ・ハケ目・ケズリ	橙 色	#	III A2a	
26	土 器	甕			(181)			タタキ	橙 色	#	III A3a	
第 21 団	27	土師器		145	88	158		ナデ・ハケ目	淡 黄 橙 色	ST4	I B1b	
	28		蓋			(25)	ヘ ラ 切		青 灰 色	#	II A	
	29			141		36	#		青 灰 色	#	II A2	
	30	須恵器	坪	147	120	43	#		灰 白 色	#	II C 1 2b3	
	31			149	92	43	#		淡 黄 橙 色	#	#	
	32		高台付坪	121	77	45	#		暗赤褐/橙 色	#	II B1b	
	33							タタキ	灰 赤 色	#	II E2	
	34	あかやき	甕	214				タタキ・ケズリ	橙 色	#	III A3a	
	35	土 器		200		(63)			橙 色	#	III A3b	
	第 22 団	36		蓋	155		36	ヘ ラ 切		灰 白 色	ST5	II A3b
37				147		36	#		灰 白 色	#	II A2	
38		須恵器	坪	137	85	34	#		淡 黄 橙 色	#	II C 1 2b1	
39				129	74	36	#		淡 黄 色	#	II C 1 2b3	
40			152	77	44	回転糸切り		灰 白 色	#	II C II		

表-3 遺物観察表(2)

棟号	遺物 番号	器 種		計測値(mm)			底 部 切 離	調 整 技 法 ・ 色 調	出土地点	分 類			
				口径	口径	器高							
第 22 回	41	須恵器	高台付坏	125	84	40	ヘラ切	灰白色	ST5	II B1b			
	42			124	(73)	(41)	#	灰色	#	#			
	43	あかやき 土器	甕	239	88			タタキ・ケズリ	淡黄橙/橙	#	III A3a		
	44			65	(115)			ケズリ・ハケ目	橙	色	#	III A3b	
	45			158	76	169				赤	色	#	III A2b
第 23 回	46					(245)		ハケ目	にぶい橙	#	III A3b		
	47	土師器	坏	155	76	48		ナダ・ケズリ・ミガキ・内面黒色処理	淡黄橙色	ST30	I A3		
	48	須恵器	高台付坏		95	(24)	ヘラ切		藍褐赤褐色	#	II B・		
	49	あかやき 土器	甕	214		(263)		タタキ・ケズリ・ハケ目	橙/にぶい橙	#	III A3b		
	50			224		(134)		ハケ目・ケズリ・カキ目	灰褐色	#	III A3c		
第 24 回	51			188	89	174		カキ目・ケズリ	赤	色	#	III A2b	
	52		竈	162	106	305		カキ目・タタキ・ハケ目	にぶい橙	#	III A1		
第 25 回	53	須恵器	甕			(69)		タタキ	黒褐色	SK48	II E2		
	54	土師器	坏					ミガキ・ケズリ・内面黒色処理	橙	色	SD1	I A1	
	55			168	85	71		#	#	橙/淡黄橙色	#	I A2a	
	56			150	78	70		#	#	黒/淡黄橙色	#	#	
	57			166	78	81		#	#	橙	色	#	#
	58			161	86	69		#	#	橙	色	#	#
	59			149	70	65		#	#	橙	色	#	#
	60			150	75	55		#	#	灰白色	#	#	
	61			152	64	73		#	#	淡黄橙色	#	I A2b	
	62			176		(72)		ハケ目		淡黄橙色	#	I B1c	
	63			145	79	128		#		灰褐色	#	I B1a	
	64			119	73			#		橙/褐色	#	I B1b	
	65					97	(51)	#		黄橙色	#	I B1a	
	第 26 回			66	須恵器	甕	180		40	ヘラ切	灰白色	#	II A1a
67		151		31			#		緑黒/青灰色	#	II A1b2		
68		143		35			#		青灰/暗青灰色	#	II A1b1		
69		136		23			#		青灰/暗青灰色	#	II A1b2		
70		148		31			#		青灰/暗青灰色	#	II A1c		
71		168		23			#		淡黄色	#	II A3a		
72		165		29			#		灰/灰白色	#	II A2		
73		159		37			#		灰	色	#	II A3a	
74		162		(14)			#		淡赤褐色	#	II A		
75		164		(17)			#		暗赤褐色	#	#		
76		165		(25)			#		淡黄橙/明黄灰/赤色	#	#		
同		77	坏	139			98	33	#		灰/灰白色	#	II C13b1
		78		132			95	37	#		灰白色	#	II C12b2
		79		142	95	42	#		赤橙/淡黄/暗赤灰色	底にぶい橙	#	II C12b3	
	80	119		79	35	#		暗青灰/明オリブ灰色	#	II C12a1			

表-4 遺物観察表(3)

押回	遺物 番号	器 種	計測値(mm)			底 部 切 埋	調 整 技 法 ・ 色 調	出土地点	分 類
			口径	底径	器高				
第 26 回	81	須恵型 坏	128	87	36	へラ切	暗青灰/青灰色	SD1	IIc1b2
	82		142	85	37	"	灰 白 色	"	"
	83		139	87	39	"	灰 白 色	"	"
	84		150	86	33	"	灰 白 色	"	IIc1
	85		123	82	30	"	灰 白 色	"	IIc1a1
第 27 回	86		84 (28)	"	"	灰 白 色	"	"	IIc1
	87		133	92	38	"	緑 黒 / 灰 色	"	IIc1b2
	88		152	71	38	"	赤褐/灰白/にぶい橙色	"	IIc1c2
	89		131	98	31	"	灰 白 色	"	IIc1
	90		153	100	30	"	淡黄/青灰色	"	IIc1c4
	91		133	85	40	"	灰 白 色	"	IIc1b2
	92		123	73	30	"	青 灰 色	"	IIc1a3
	93		152	102	38	"	灰 白 色	"	IIc1c1
	94		132	91	33	"	灰 白 色	"	IIc1b1
	95		139	104	33	"	灰 白 色	"	IIc1b1
第 28 回	96		139	100	38	"	灰 白 色	"	IIc1b3
	97		153	99	40	"	へラ描き 灰 白 色	"	IIc1c2
	98		155	105	43	"	橙/淡黄橙色	"	"
	99		128	72	33	"	青 灰 色	"	IIc1b3
	100		149	98	36	"	灰 白 色	"	"
	101	149	85	38	"	灰 白 色	"	"	
	102	132	80	39	"	淡黄橙色	"	IIc1b2	
	103	136	85	35	"	灰 白 色	"	"	
	104	149	106	40	"	橙 色	"	IIc1b3	
	105	135	90	33	"	暗 赤 褐 色	"	IIc1b2	
第 29 回	106	145	91	37	"	灰 / 灰 白 色	"	IIc1b3	
	107	134	85	40	"	へラ描き 暗赤灰/灰白色	"	IIc1b2	
	108	153	95	39	"	灰 白 色	"	IIc1c2	
	109	132	91	30	"	灰 / 暗 灰 色	"	IIc1b1	
	110	132	82	41	"	暗灰/青灰色	"	IIc1b4	
第 29 回	111	124	82	27	"	青黒/青灰色	"	IIc1a3	
	112	142	98	35	"	淡黄橙色	"	IIc1b2	
	113	132	89	31	"	橙 色	"	"	
	114	147	99	30	"	灰 白 色	"	IIc1	
	115	152	78	36	"	灰 白 色	"	IIc1c2	
	116	142	86	37	"	淡黄橙/橙色	"	IIc1b1	
	117	127	88	35	"	灰 / 橙 色	"	IIc1b3	
	118	147	99	35	"	灰 白 色	"	IIc1b1	
	119	129	89	30	"	明 青 灰 色	"	IIc1b3	
	120	140	100	35	"	灰 白 色	"	IIc1b1	

表-5 遺物観察表(4)

神田	遺物 番号	器 種	計測値(mm)			底 部 切 離	調 整 技 法 ・ 色 調	出土地点	分 類	
			口径	底径	器高					
第 29 園	121	須恵器	141	89	41	ヘラ切	灰 白 色	SD1	II C1b3	
	122		135	95	34	〃	灰 白 色	〃	II C1b2	
	123		149	89	41	〃	〃	〃	II C1b3	
第 30 園	124		147	92	41	〃	灰 白 色	〃	II C1b1	
	125		140	80	41	〃	灰 白 色	〃	II C1b3	
	126		151	91	30	〃	灰 白 色	〃	II C1c1	
	127		141	92	38	〃	灰 色	〃	II C1b1	
	128		133	85	41	〃	橙色 藍 青灰/赤褐色	〃	II C1b3	
	129		121	74	35	回転糸切り	青 灰 色	〃	II C II	
	130		139	90	35	ヘラ切	灰 白 色	〃	II C1b3	
	131		134	86	32	〃	ヘラ揃	灰 白 色	〃	II C1b2
	132		123	84	38	〃	暗青灰/青灰色	〃	II C1a3	
	133		145	95	30	〃	橙 色	〃	II C1b4	
	134		144	93	42	〃	灰 白 色	〃	II C1b2	
	135		142	93	33	〃	青黒/青灰色	〃	II C1b1	
	136		154	92	41	〃	灰 白 色	〃	II C II	
	137		149	105	31	〃	青 灰 色	〃	II C1b4	
	138		137	90	42	〃	灰 白 色	〃	II C1b2	
	第 31 園		139	140	88	37	〃	灰 白 色	〃	II C1b1
140			137	100	31	〃	黒/青灰色	〃	II C1b1	
141			105	78	28	〃	暗 青 灰 色	〃	II C1a1	
142			152	97	34	〃	にぶい青橙色	〃	II C1c2	
143			140	101	31	〃	灰 白 色	〃	II C1b1	
144			140	100	35	〃	灰 白 色	〃	II C1b1	
145			157	104	39	〃	灰 白 色	〃	II C1c2	
146			103	68	36	〃	灰 色	〃	II C1a1	
147			92	(33)	〃	〃	灰 白 色	〃	II C I	
148			139	94	35	〃	浅 黄 橙 色	〃	II C1b2	
149			156	93	50	〃	ヘラ揃(山)	黒 色	〃	II C1c3
150	83		(23)	〃	〃	灰 白 色	〃	II C I		
151	144		94	36	〃	緑 灰 色	〃	II C1b2		
152	154		108	39	〃	浅 黄 橙 色	〃	II C1c2		
第 32 園	153		141	86	51	〃	灰白/灰色	〃	II B2b	
	154		130	80	42	〃	青 灰 色	〃	II B3a	
	155		146	91	55	〃	暗 灰 色	〃	II B2a	
	156		146	85	52	〃	暗青灰/にぶい赤/灰白色	〃	II B2b	
	157		120	79	43	〃	青 灰 色	〃	II B1b	
	158		146	(80)	(54)	〃	明 赤 褐 色	〃	II B2a	
	159		119	55	40	〃	暗 青 灰 色	〃	II B1a	
	160		153	(111)	(44)	〃	灰 色	〃	II B3a	

表-6 遺物観察表(5)

種別	遺物 番号	器 種	計測値(mm)			底 部 切 差	調 整 技 法 ・ 色 調	出土地点	分 類		
			口徑	器高	器高						
第 32 回	161	高台付 甕	133	81	44	ヘラ切	青灰色	SD1	II B3a		
	162		113	69	42	〃	青灰色	〃	II B1b		
	163			94	(22)	〃	青灰色	〃	II B		
	164		122	83	47	〃	青黒/青灰色	〃	II B1b		
第 33 回	165		150	92	40	〃	青灰色	〃	II B3b		
	166		145	93	48	〃	〃	〃	II B3a		
	167		126	81	51	〃	暗緑灰色	〃	II B2c1		
	168		135	90	41	〃	暗青灰色	〃	II B2b		
	169		137	95	52	〃	橙 色	〃	II B2c2		
	170				(90)		青黒/赤灰色	〃	II D1		
第 34 回	171			(97)		オリーブ灰/青灰色	〃	〃			
	172	甕	198		(69)	タタキ	紫 灰 色	〃	II E2		
	173		209		(136)	〃	にぶい赤褐色	〃	〃		
174				(58)	〃	灰 白 色	〃	〃			
175	180			(195)	カキ目	オリーブ灰色	〃	〃			
176	335		146	213	ケズリ・ハケ目	〃	〃	II E3			
177	156		84	100	カキ目	褐 灰 色	〃	II E2			
第 35 回	178				(204)	タタキ	青 灰 色	〃	〃		
	179					〃	〃	〃	〃		
	180					〃	〃	〃	〃		
	181					〃	〃	〃	〃		
第 36 回	182				〃	〃	〃	〃			
	183	横 瓶				タタキ・カキ目	〃	〃	II F		
	184					カキ目	〃	〃	〃		
第 37 回	185	あかやき 土 器	甕	149	62	146	カキ目・タタキ	橙/にぶい橙色	〃	III A2a	
	186			151	98	165		橙 色	〃	III A2b	
	187			127	95	117		橙 色	〃	〃	
	188				85	(34)		橙 色	〃	〃	
第 38 回	189	須 恵 器	坏	149	101	36	ヘラ切	灰 白 色	75-20-20G	II C 1 2b3	
	190			156	96	42	〃	灰 白 色	30-20G	II C 1 2c3	
	191			147	94	45	〃	灰 白 色	79-36G	II C 1 1b2	
	192		高台付坏	126	80	52	〃	青 灰 色	80-40G	II B2a	
	193		円形甕	106	184	53		3/4欠損	〃	60-30G	II G
	194		甕					波状文	〃	60-15G	II F2

VI ま と め

(1) 遺構について

本遺跡で検出された遺構のうち、明確にその性格が判明するものは掘立柱建物跡2、竪穴住居跡8（ST7は図から除外）、土壇35、溝跡5（SD1を中心に考える。）である。他に小柱穴と考えられる250に及ぶピットが検出されたが、柱列構成及びその時期、性格については不明のため、本報告ではほとんど言及していない。

さて、各遺構の重複関係についてみてみると、住居跡間の重複は、SB9掘立柱建物跡とST2竪穴住居跡で認められるにとどまる。旧SB9→新ST2が土層観察から考えられる。土壇と住居跡については、ST7、ST30で重複関係があるが、土壇出土の遺物が僅かなこと、一括資料を通して土壇の時期を明確にし得ない点などから言及は避けたい。

竪穴住居跡の構造・方位等を考えると、カマドをもつもの、あるいは破壊されたと思われるものは、ST2・3・4・30で、いずれも南壁東側に構築される特徴をもつ。方向（主軸方向）では、ST2・3・4・5・30のグループとST6・7・8のグループに分けられる。また、規模では、一辺6～7mの大型のST6・30と、一辺5～6mの中型のST2・3・4・5、一辺4m未満と小型のST7・8がある。これら各竪穴住居跡は、重複関係が全くないため、相互の新旧関係あるいは同時期か否かについては出土遺物から追求するより方法はない。次項で各遺構の土器組成等に言及する中で先の方位、構築方法等を踏まえて、さらに次に述べるSD1溝跡との関連も含め考えてみたい。

SD1溝跡は、本遺跡で最も大量の遺物が出土した遺構である。発掘調査時点での登録遺物が72点、整理中に接合あるいは復元実測したものを含め、さらに破片資料を入れれば整理箱に10箱を数える。本報告ではそのすべてについて触れることができなかつたため、SD1の性格については若干推測の域を出ない部分もある。SD1は、調整区中央をほぼ東西に走る溝跡で、幅・深さもほとんど一定である。また、溝跡の北と南では遺構の分布が極端に異なる点も特徴的である。遺物は砂層の上層（1・2層）からのみ集中して出土している。覆土、検出面（IV～V層）の状況から、本溝跡は該期の遺構と考えられ、このことは、単一層出土とも言うべき一括遺物を考えるうえでの前提となる。

遺構はSD1北側に集中している。恐らく調査区北半から調査区外北側一面が本遺跡の中心となる区域と考えられる。今次調査では住居跡の他、集落を構成する土壇、溝跡が検出されたが、井戸跡、倉庫跡等は未検出であった。従って集落構成要因のすべてが検出されたわけではなく、一側面がとらえられたに留まるにしても本地域の該期の様相を知るう

えではその意義は大きいものがある。

(2) 遺物について

a 遺構における遺物の組成

以上の遺構は、性格不明の小ピット群、遺物を含まない大半の土壌及び小溝跡を除く主要なものは既述のとおり、重複関係からその時期差を求めることはほとんど不可能であり、また遺構の在り方からみた場合でも概略的にはグルーピングができるものの詳細な検討はできない。したがって、ここでは、一括遺物の出土した遺構あるいは主要な遺構出土の土器の組成（先に類別したものを基礎として）を概略的にみてみたい。なお、扱う資料は、本報告中で図示し得るものに限定せざるを得ないため、偏った結果の出ることも予想されることを付記する。

(竪穴住居跡)

ST2 カマド側壁西側で立位で出土した土師器甕2(第18～37箇中番号・以下同じ)がその出土状況から本住居跡の時期決定資料となる。3・4は覆土中層出土、5～7も同様である。3～7は住居跡廃絶後に投棄されたものと考えられる。その他、カマド周辺及び柱穴覆土より2に類する(IB2a)が多く出土している。本住居跡からは小片で391点の出土があったがうち346点がIB2a、須恵器は図示したものの他覆土より坏片14、蓋4、甕1点が出土したが、いづれも小片のため分類はできなかった。なお、坏底部はすべてヘラ切りによる切り離しである。

ST3 住居跡南西コーナー床面出土の土師器甕11(1B2a)、同じく12(1B2b)、須恵器蓋15(IIA4)が一括資料のセットとなる。その他、覆土下層出土のケズリを伴う須恵器壺15(IID1)、須恵器坏20(IIcII)、21(IIc1IIb1)、22(IIc12b2)、なども床面に近い出土となる。住居跡全体では土師器甕(1B1・1B2)の細片が圧倒的に多く856点を数える。その他土師器坏8点(IA2a)、須恵器坏59点、蓋12点、甕30点が出土しているが、小片のため分類はしなかった。

ST4 カマド部分出土の土師器甕27(1B1b)、床面出土の須恵器蓋28(IIA1)、南壁際出土の須恵器坏30(IIc12b3)、カマド内焼土層中出土のあかやき土器甕35(IIIA3b)及び覆土下層出土のあかやき土器甕34(IIIA3a)が本住居跡廃絶時あるいは近い時期に存在した土器となる。本住居跡では図示したものを以外410片の土器が出土したが、上記以外は大半が覆土中～上層出土である。土師器甕が310点と全体の75%、そのうち、37点がカマド出土である。その他、須恵器坏が37点、甕、蓋、あかやき土器甕片が出土した。

ST5 本住居跡は土壌と重複している。土層観察では住居跡を切って土壌が構築されている。図示したタケキのあるあかやき土器甕43(IIIA3a)が土壌内出土となる。住居跡出土の36～46(43を除く)は、いづれも覆土上～中層であり、住居跡と直接的にかかわ

るものではないと考えられる。したがって、土壌出土の遺物と住居跡覆土出土の遺物については新旧関係は判明するものの、どの程度の時期差かは判然としない。覆土全体では、図示したものの他、184点が出土し、うち178点が土師器甕片（I B 1・2）で、その他6点があかやき土器甕片（III A 2・3）である。細片のため細かい分類はひかえた。

ST 30 図示した47～52はいずれも住居跡床面～覆土下～中層出土である。一括出土というわけではないため、資料としての扱いは慎重を期す必要があるだろう。土師器坏47（I A 3）の他は土師器は図示し得ない細片（甕 I B 1・2）が178点出土している。図示した中ではタタキやカキ目のあるあかやき土器49～52が目立つ。

（溝 跡）

SD 1 本遺構出土の遺物はほとんどが単一層からの一括出土である。出土状況から、短期間に集中的に投棄されたものと考えられる。土師器では、体部下半が有段の54（I A 1）が他の土師器杯と様相を異にする。図示した中では土師器甕の I B 2 a, I B 2 b が抜けているが、これは破片資料のうちの土師器に多量に含まれる。須恵器の蓋ではつまみ部が宝珠形となる II A 1, 宝珠形とならない II A 2 が共伴している。須恵器の高台付坏では、口径の小さい II B 1, 口径が中程度で稜線的な縁が形成される II B 2 が特徴的である。坏は口径と器高の指数、器形の特徴から細分した分類のうち大半が出土している。ヘラ切りによる切り離しと法量の関連から見れば、本報告で分類した方法にどれ程の意味があるかは別として、これらの要素を加味して細分すれば先に分類したようなバリエーションが得られることになる。その他、大半が回転ヘラ切りの中で、数点ではあるが、回転系切りによる切り離し技法の坏が認められる。法量・器形ともヘラ切りの坏との差はほとんど認められない。須恵器の壺・甕では、器形の判然とするものは少く、分類でもやや大まかに扱った。その中で特徴的なものとして、体部外面に横方向のカキ目のみられる175（II D 2）、大形の鳩様の176（II E 3）、小形の広口甕の177（II E 1）、体部下半に耳のつく198（II E 2）、外面のタタキ痕が稜杉状となる179（II E 2）などがある。あかやき土器については、図示した点数が少なく、また、破片資料の数も、煮沸形態の土器としては土師器が圧倒的に多数を占める。分類においても、一応の基準として、須恵器の技法を用いたもの、あるいは、類似する器形・調整で須恵器と共通するものをここでは便宜上あかやき土器として扱ったが、問題は多いと思われる。なお、破片資料についての詳細は未分析な点が多いため別稿にて触れてみたい。

b 遺物の年代について

既述のとおり、各土器について分類し、主要な遺構について概略ではあるがその組成をみた。ここでは各々分類された土器について、製作技法、器形等から年代についてみてみたい。

土師器では有段の坏（IA1）と無段の坏（IA2・IA3）に大別ができる。IA1は1点のみの出土である。有段・丸底の特徴は東北地方の土師器編年で国分寺下層式第1類（氏家：1961, 1967）とされている。この種の坏と、IA2との共伴は宮城県清水遺跡第17・90号住居跡などでも認められている。IA2はやや丸底風の平底で、口縁部・体部がやや内弯して立上がる。さらにロクロ不使用である。これらの特徴は従来対馬式として型式設定されていたが（氏家：1957）、最近では国分寺下層式の中に含めて考えられている（桑原：1976, 他）。甕については、該期の編年が資料的制約から、東北各県とも坏を中心に考えられており、坏との共伴関係で考察されているのが大半である。山形県においては、坏に限らず、該期の一括資料が極めて少ないという状況にあり、その意味では逆説的に一括出土の坏IA2との共伴において国分寺下層式期の資料として大きくとらえられることができる。

須恵器は図示したものの大半が坏である。共伴関係では、前項（組成について）で触れたように、SD1出土の一括資料の在り方が重要になる。すなわち、坏に限らず、前述の土師器坏その他についても、極めて短期間に集中的に投棄された状況である点である。総じて、山形県内の須恵期の編年は、平安時代以降については報文、論文が比較的多いが、該期については資料的制約もあり、まだ確立はしていない。その中で、主なものとして、内陸地方では川西町壇山第1号窯跡、山形市小松原第1号窯跡（柏倉・伊藤：1960）、山形市西高敷地内遺跡（佐藤他：1979）、河北町熊野台遺跡（佐藤他：1980）、川西町道伝遺跡（藤田他：1984）で比較的多くまとめて取り上げられている。また、胎土・色調は、いわゆる灰白色、青灰色を呈するもの他、橙色や、やや赤褐色を呈するものも本遺跡では含まれる。これらは、あかやき土器との関連で問題となると考えられるが、胎土から明らかに須恵器とみられるため、すべて須恵器として扱った。年代的には、稜を有するIIB2a・b等とIIC1の各類を一括して、前述の土師器坏との共伴において土師器の国分寺下層式と併行させる。須恵器の甕ではIIE1が土師器あるいはあかやき土器とされる甕と器形的に共通するが、胎土は須恵器である。また、IIE3の鉢形ものは熊野台遺跡等でも散見される他、庄内地方、酒田市の手蔵田2遺跡でもみられる。手蔵田2遺跡では、IIE3の他、ヘラ切りの須恵器坏、宝珠形のつまみをもつ蓋等を一括し、報告者は奈良時代後半～末葉期の土器群（阿部：1985）としてとらえている。

あかやき土器は、その定義で種々の問題がある。本県の例でも、山形市境田C'・D遺跡(渋谷:1984)の報文では詳細な検討を踏まえ、本県の庄内地方で言うあかやき土器甕を含めて、ロクロ使用でタタキの認められない甕は土師器として扱っている。本報告では、区分のあいまいさはいないが、タタキの認められるもの、本遺跡出土の須恵器甕と成形技法が共通するものはあかやき土器として扱った。新旧関係でみれば、ST5との重複による土壇出土の43(ⅢA3a)からST5より新しい時期のものであることが判明するにとどまるが、同じくST5出土の45(ⅢA2b)に後続するものであるかは出土の状況からのみでは判然としない。また、ST30出土の52(ⅢA1)も体部下半にタタキをもつ甕は類例が少なく特徴的である。これらはST30床面出土であるが、ロクロ不使用で国分寺下層式とみられる土師器坏47(ⅠA3)と共伴と考えられることから、すでに貯蔵形態としてのあかやき土器がこの時点で認められることとなる。

以上、概略的に、各種別毎の土器についてみた。SD1出土の一括土器が本遺跡の中心となるが、各遺構間の重複がないため、出土遺物自体による新旧関係は出し得ない。また、SD1と他の遺跡とのかかわりでは、ST5の覆土出土の須恵器蓋とSD1出土の資料が接合、さらに、ST6覆土出土の須恵器坏(糸切り)とSD1の資料が接合した。したがって、SD1に投棄された同時期に、ST5及びST6は廃絶していたことがうかがえる。しかし、その他の細かい年代については資料自体から考える他になく、ここでは、土師器の編年を中心とし、その共伴関係からSD1を大きく国分寺下層式期の終末、実年代では8世紀末、奈良時代後半の土器群としてとらえる。

(3) まとめ

本遺跡では奈良時代後半を中心とする遺構・遺物が検出された。住居跡では、8棟の竪穴住居跡と2棟の掘立柱建物跡が検出された。これらは、重複関係や出土遺物から大きく2時期に分けられる。すなわち、I期:SB9・10(掘立柱建物跡)、II期:ST2及びその他の竪穴住居跡、しかし、SB9とST2の重複をもって、すべてI・II期に区分するのは危険であり、当然、併存した竪穴住居の存在も予想しなければならぬ。竪穴住居では、ST5と6がSD1との接合関係によりSD1への土器投棄時には廃絶していたことが明らかで、もし、SD1と同時期に竪穴住居が存在したとすれば、上記の2期区分はさらに細くなる可能性がある。しかし、遺物をみた場合、総じて半世紀以上の幅をもつものではないことから、極めて短い期間に限定される集落であるとも言えよう。

本地域では、県教委あるいは町教委により近接する同時期と考えられる遺跡が調査されている。ここでは、それらとの関連のうえで広い意味での考察はできなかったが、今後、これらについて分析を進め、該期の様相を明らかにしなければならない。

〈参 考 文 献〉

- 柏倉克吉・伊藤 忍 「平野山古窯群」 寒河江市教育委員会 1970
- 氏家和典 「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』14輯 東北史学会 1957
- 佐藤庄一 「山形県における平安時代の土器様相（予察）」『庄内考古学16』 1979
- 川崎利夫 「山形県における土師器編年試論」『庄内考古学16』 1979
- 加藤道男・阿部博志 「观音沢遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書IV』宮城県教育委員会 1980
- 丹羽 茂・小野寺祥一郎・阿部博志 「清水遺跡」『同上V』宮城県教育委員会 1981
- 高橋与右衛門 「須恵器大甕にみられる「放射状当て痕」について」『(財)岩手県埋蔵文化センター紀要IV』
1984
- 藤田宥宣 「道伝遺跡発掘調査報告書一置戸郡新推定地一」川西町教育委員会 1984
- 野川主計・高橋郁夫 「月山堂遺跡発掘調査報告書」河北町教育委員会 1982
- 野川主計・高橋郁夫 「一の坪遺跡発掘調査報告書」河北町教育委員会 1981
- 野川主計・高橋郁夫 「溝延馬場遺跡発掘調査報告書」河北町教育委員会 1980
- 森 賢喜・平沢英二郎 「水入遺跡発掘調査報告書」宮城県教育委員会 1982
- 渋谷孝雄・阿部明彦 「境田C・D遺跡発掘調査報告書」日本道路公団仙台建設局・山形県教育委員会 1984
- 佐藤庄一他 「山形西高敷地内遺跡発掘調査報告書」山形県教育委員会 1979
- 佐藤庄一他 「熊野台遺跡発掘調査報告書」山形県教育委員会 1980
- 佐藤正俊他 「柏倉地区遺跡群発掘調査報告書」山形県教育委員会 1981
- 阿部明彦 「宅田遺跡発掘調査報告書」山形県教育委員会 1981
- 安部 実・佐藤庄一 「新青渡遺跡第1次発掘調査報告書」山形県教育委員会 1983
- 田辺昭三 「須恵器大成」角川書店 1981
- 茨木光裕 「上市市久保手窯跡発掘調査報告書」上市市教育委員会 1983

図

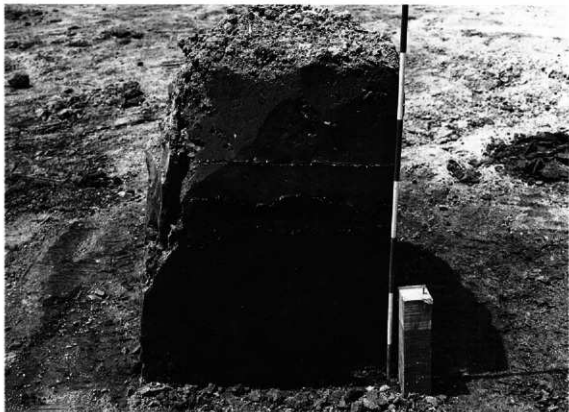
版



遺跡遠景 (南から)



試掘風景



層序



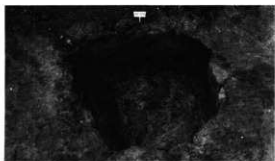
調査風景 (SD1)



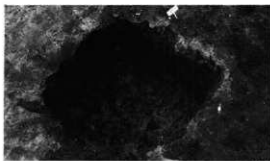
SB9完掘状況



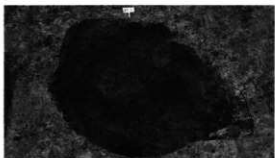
SB10完掘状況



EP 1



EP 2



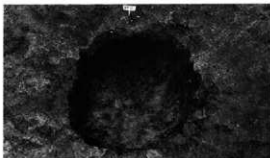
EP 3



EP 4



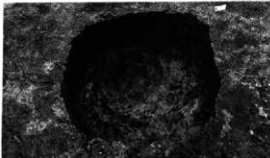
EP 5



EP 6



EP 7



EP 8



EP 9



EP 10

图版 5 SB10柱穴



EP 1



EP 2



EP 3



EP 4



EP 5



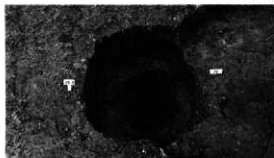
EP 6



EP 7



EP 8



EP 9



EP 10



プラン確認状況



完掘状況 (西から)



完掘状況 (北東から)



カマドセクション



カマド完掘状況



カマド完掘状況



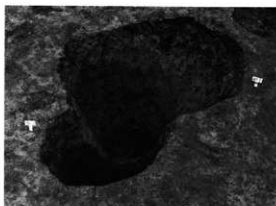
土層セクション



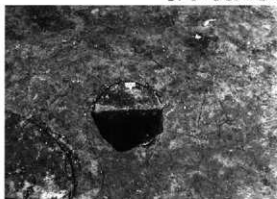
土層セクション



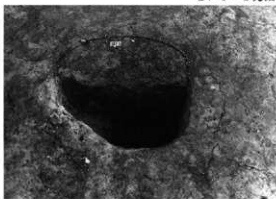
EP1・2セクション



EP1・2完振



EP3セクション



EP5セクション



EP7セクション



EP8セクション



EP9セクション



ED10セクション



ST3 完掘状況 (手前)



プラン確認状況



床面検出状況



カマドセクション



土層セクション



土層セクション



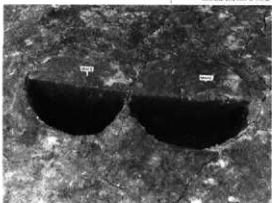
土層セクション



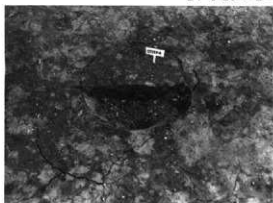
土器出土状況



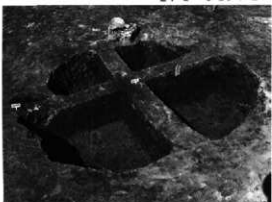
EP1セクション



EP2・3セクション



EP4セクション



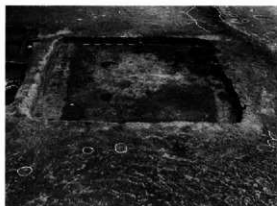
EK6セクション



ST2・3・4発掘状況



完掘状況



床面検出状況



土層セクション



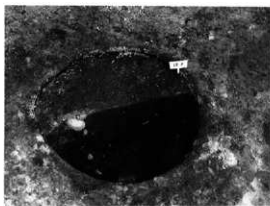
カマドセクション



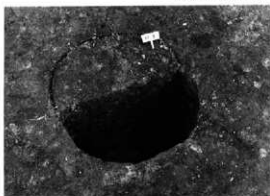
カマド完掘状況



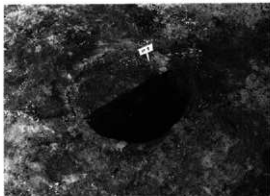
EP 1セクション



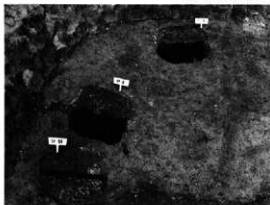
EP 2セクション



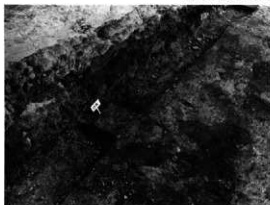
EP 3セクション



EP 4セクション



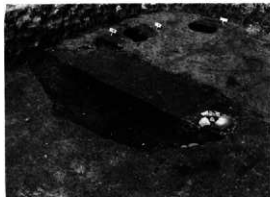
EP 5・6・14セクション



ED 15セクション



カマド発掘状況



EK 13セクション



全 景



土層セクション



土器出土状況



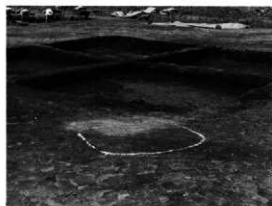
土器出土状況



土器出土状況



完掘状況 (北から)



土層セクション



床面検出状況



EP1セクション



EP1完掘状況



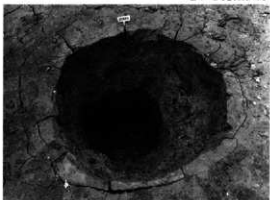
EP 2 セクション



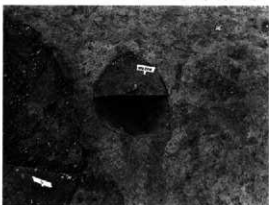
EP 2 完掘状況



EP 3 セクション



EP 3 完掘状況



EP 4 セクション



EK 5 セクション



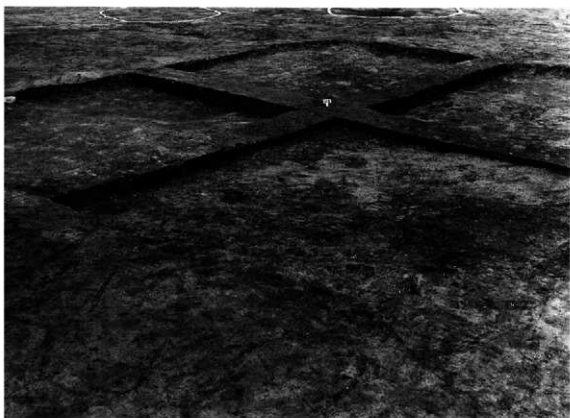
EK 6 セクション



ST 6、SB 9 他完掘風景



発掘状況（南から）



土層セクション



完掘状況 (北から)



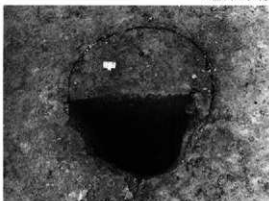
土器出土状況



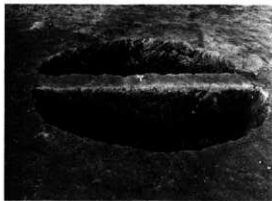
土器出土状況



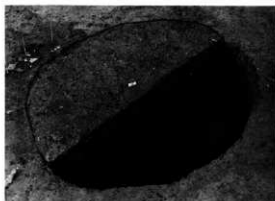
EP1セクション



EP2セクション



SK11セクション



SK12セクション



SK13セクション



SK13 完掘状況



SK14セクション



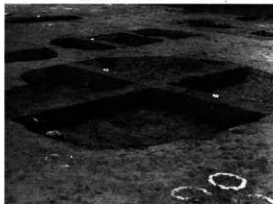
SK14完掘状況



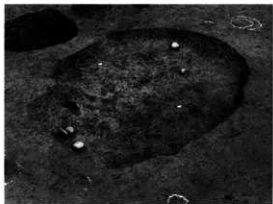
SK15セクション



SK15完掘状況



S K 16・17セクション



S K 16・17発掘状況



S K 18セクション



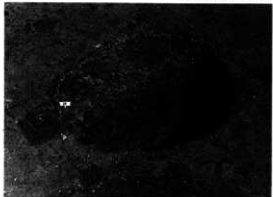
S K 20セクション



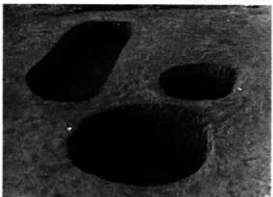
S K 21セクション



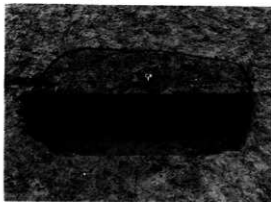
S K 28セクション



S K 29セクション



S K 28・29・36発掘状況



SK 41セクション



SK 41完掘状況



SK 42 a・bセクション



SK 43完掘状況



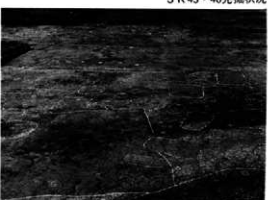
SK 45・46セクション



SK 45・46完掘状況



SK 48完掘状況



土壌群プラン確認状況



遺物出土状況全景



土器出土状況



土器出土状況



土器出土状況



土器出土状況



土器出土状況



土器出土状況



土層セクション



土層セクション



土層セクション



土層セクション



底面検出状況



底面検出状況



全景



調査風景



2



13



15



3



14



4



17



21



11



12



22



23



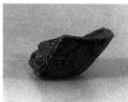
24



25



29



30



32



31



38



36



37



39



40



41



42



43



45



52



51



56



55



59



60



61



63



64



66



67



68



69



70



71



72



73



75



76





95



96



97



98



99



100



101



103



104



105



106



107



108



110



111



112



113



114



115



116



117



118



119



120



122



123



124



125



126



127



128



129



130



131



133



134



136



137



138



139

圖版29 出土遺物 (8)



140



141



142



145



146



147



148



149



151



152



153



154



155



156



157



158



159



160



161



162



164



165



167



168



172



173



176



178



185



186



187

図版31 出土遺物 (10)



177



188



184



189



190



191



192



193



194

山形県埋蔵文化財調査報告書第100集

ゆすゝるぎ
不動木遺跡

発掘調査報告書

昭和61年3月20日 印刷
昭和61年3月25日 発行

発行 山形県教育委員会
印刷 榊大風印刷
